家庭雜誌

第六拾壹號

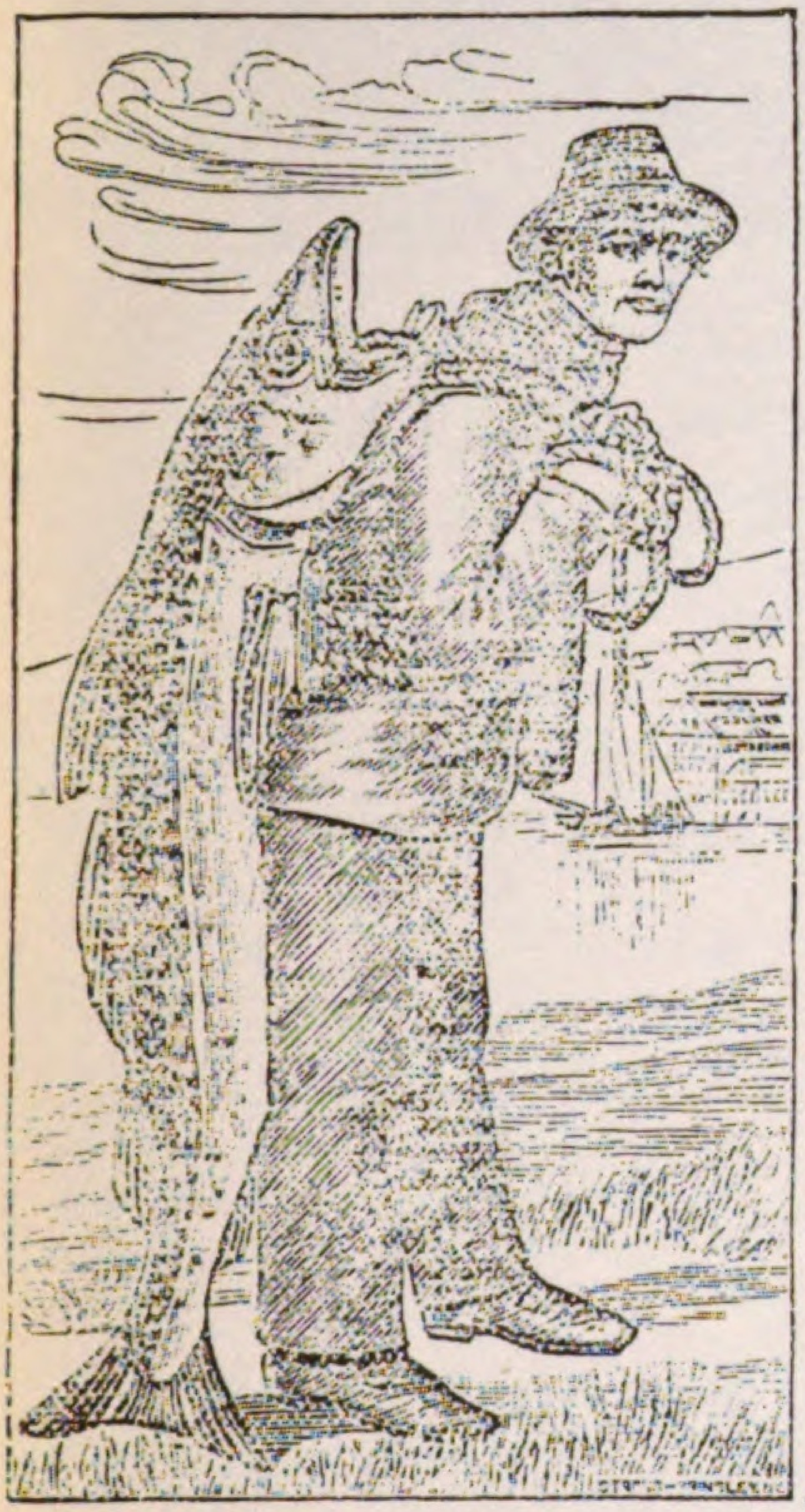
校風の養成　家風は子女の氣質を作り校風は子弟の氣質を作る

オブロモフの幼時　清麗の筆もて叙せらる

女優の摸範　優しき語もて語らる

恐ろしき一夜　火は一時に五個所に燃へ焔は五個所より分れ上れり

椎の木　かの椎の木！



○血液○は常に充分ありて病毒なきを本性とす、貧血症は滋養分なき血液より起るものにして瘰癧は病毒の萌芽を顯すものなり、○○○○○彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く血液を富まし之れを清淨にし凡て血液より起る瘰癧貧血等を豫防し身躰を養ふに必要なる血液を造るなり●●筋肉の減少するは滋養分の缺乏を示すものなり此の場合にはスコット乳菓に多く含み居る處の精力を恢復し疾病を防ぐに必要なる成分を要するなり

○健全なる筋肉○は活力を貯へ居りて必要ある時に出で來て、補ひをなすものなり肉の落ちて瘦せ行くは活力を求めつゝあるを示すなり、此時何か申分あるなりスコット乳菓は必要缺くべからさる滋養分を與へて筋力の衰へたるを速に恢復するの効最も著しきものなり、殊に瘦せたる婦人には最奇効あるなり咳嗽、風邪、咽喉病、肺病、血液病及び虛弱等に、此乳菓の効驗實に驚くべし●世界の大醫は此の乳菓を最も効能ありて精氣を增し滋養分ある食料と證明し居れり

○スコット乳菓の說明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ御申越あれば無代價進呈す

左の大取次所の外各藥舗に賣捌居れば御求あれ

横濱境町	友田嘉兵衛
同　境町	鳥居德兵衛
同　太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
同　室町	資生堂
同　本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
同　道修町二丁目	武田長兵衛
同　道修町三丁目	田邊五兵衛
同　道修町二丁目	田畑利兵衛
同　道修町二丁目	福田清右衛門
同　道修町二丁目	鹽野儀兵衛

塚越芳太郎著

近松門左衛門

印刷中

目錄

◉第一、近松の著作◎(一)彼が著作の類別〇史戯曲〇社會戯曲〇史戯曲と社會戯曲◎◉(二)彼が戯曲の躰〇如何に唱歌すべく適當なる躰を有する乎〇如何に演劇すべく適當なる躰を有する乎◎(三)彼が戯曲の躰の進歩◎(四)彼が戯曲の想〇戯曲の主意〇人物の性情◎(五)彼か戯曲の想の開展◎彼が戯曲の効果〇彼が戯曲より學び得べき教訓〇彼が戯曲より學び得べき歴史〇彼が戯曲より學得べき文學◉第二、彼の史戯曲◎「雪女五枚羽子板」解剖◎「曾我會稽山」解剖◎「國姓爺合戰」解剖◎「關八州繫馬」解剖◉第三、彼の社會戯曲◎「薩摩歌」解剖◎「戀八卦昔暦」解剖◎「丹波與作」解剖◎「五十年忌歌念佛」解剖◎「戀飛脚」解剖◎「鎗權三重帷子」解剖◎「博多小女郎浪枕」解剖◎「天の網島」解剖◎「女殺油地獄」解剖

既往の日本は如何に彼の著作を秘藏することを誇るを得るや。彼の著作は其眞成の價値を以て如何に貴重せらるゝに足るや。此書は則ち詳に此の疑問に答へたる者。

發兌元　東京市京橋區日吉町　民友社

新刊

青年叢書 第四卷

職業論

紙數百八十頁

定價十二錢　郵税二錢

本卷の目次

職業の眞義（生活と事業）　宏業と功名心　職業の撰擇（上、下）
時間論　勤勞と休息　社會と退隱生涯
健康論　處世論　電氣時代の巨人

大丈夫の志す處、起つ處、安んずる處を闡明し、一代の事業を完ふするの道を概論す。有爲の青年一讀せば起業、處世の法を一悟するに庶幾からん。

本書に對する批評

（文學界）　青年叢書の第四卷なり民友子が青年を皷舞誘掖する誠に勤めたりと云ふべしなみ〳〵の筆つきならんには職業論など青年の一願を得ることとすら難き嚼蠟的のものなるべきを覺えず卷を終らしむるが子の獨得なるべし

（早稻田文學）　民友社發兌、青年叢書の第四卷、載するところ「織業の眞義」「宏業と功名心」「職業の撰擇」「時間論」「勤勞と休息」「社會と退隱生涯」「健康論」「處世論」「電氣時代の巨人トマス、エヂソン」等各項皆泰西名家の金言玉句を集め之れに本邦古今の名家の所說をさへ加へたるものなれば青年者流の好參考書なり又本卷は從來の如く見出しを本文の上に置かずして悉皆各項の初に掲げたれば躰裁一層整ひたり紙數百八十頁定價金十二錢

（東京朝日）　青年叢書第四卷として出づ職業の眞義より說起して時間、勤勞、健康、處世の論に及び富國强兵の要は職業に存するの義を述べたるなり（京橋區日吉町民友社發行）

發兌元　東京市京橋區日吉町　民友社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

○定價

一冊	金五錢	郵稅金五厘
半年（十二冊）	前金五十錢	地方稅共金五十六錢
一年（廿四冊）	同金一圓	共金一圓十二錢

○廣告料一行（廿四字詰一回ニ付）金八錢

○本誌御注文前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　金子佐治郎
編輯人　塚越芳太郎

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿八年九月十日發行
家庭雜誌第六拾壹號

目錄





家庭雜誌第六拾壹號

（明治廿八年九月十日發兌）

社説

校風の養成

家には家風ありて子女の氣質を作り、學校には校風ありて子弟の氣質を作る。

教育の活ける事業にして、教師の活ける聖經なる所以は、實に此の氣質養成の天職あるが爲め也。學術技藝の教授は學術技藝あるもの何人も之を能くすべし。然れども活ける手本として活ける感化を與へ活ける人を作るに至ては、自ら智德時に卓越し品性世に高きものあるにあらざれば能はず。

ナポレヲンが泥土を以て大將を作り、其用ゆる所をして皆立派な大將とならしめしは、其活ける感化によるにあらずや。吉田松陰の松下村塾が伊藤博文氏の歌へる如くに『如今廟廊棟梁器、多是松門受教人』の功を成したりしは、亦其活ける感化によるにあらずや。

是の故に眞に人の師たるものは獨り學術技藝を授くるを以て足れりとすべきにあらず、必ずや活ける感化を與ふるものならざるべからざる也、即ち活ける人を作らざるべからざる也。蘇峰氏が吉田松陰を許して『彼が在る所、四圍皆彼が如き人を生ず』とし、『薔薇の在る所土も亦香ばし』としたるは、善く松陰が人に師たる資格を論じたるものといふべし。

此くの如くにして人に師たるの道始めて大なる也。此くの如くにして人に師たるの天職始めて貴き也。好校風は此くの如き人に由て始めて作らるゝ也。此くの如き人に由て作られたる校風にして始めて活ける教育を施し、活ける人物を作るべきのみ。人に精神なかるべからざるが如く、學校にも亦精神なかるべからず。此

くの如き人は實に學校の精神たるもの也。

試に多數の敎師によりて學術技藝のみを授けられつゝある學校を見よ、之が學生は操行の適從すべき典型儀範を有せずして、徒に輕薄才子となるもの滔々皆是なるにあらずや。たとへ學術技藝はよく長ずる所ありとも、其人物の浮薄陋劣にして事を成すに足らざる、太だ卑むべきものあり。

今の學校の弊は、學術技藝の長せざるにあらずして、人物の作られざるに在り。世は才敏巧悧の人の作られざるを憂へずして、天下の士の作られざるを憂ふ。啻に天下の士の作られざるを憂ふるのみにあらず、實に堅實なる思想と堅實なる行爲とを有する獨立國民の作られざるを憂ふ。かの精神なき學校は則ち人の子を賊ふものにあらずや。

一校の精神ありて、斯に健全なる校風あるべきのみ。健全なる校風ありて、斯に健全なる學生あるべきのみ。健全なる學生ありて、斯に健全なる國民あるべきのみ。又健全なる國民ありて、斯に健全なる國家あるべく健全なる國風あるべきのみ。而して一校の精神は、智德品性の儀範として感化の中心たるべき人物あるにあらざれば、之が精神たるに足らざるを知らずや。

去れば世の學校たるもの、徒に學術技藝を長するを以て其能事とすること勿れ。敎育の眞意義は人物の陶冶にあり。人物の陶冶は好校風の養成にあり。好校風の養成は活ける儀範にあり。健全なる國風の源として家國進運の原動力たるべき學校の責務、重ぜずして可ならんや。

実談

オブロウモフの幼時

矢崎孤村

オブロウモフの幼時は、ゴンチヤロフ氏の名文で、

曾て某雑誌へ譯した事が有ましたが、餘りの名文故、又此處に轉載して見ました、勿論譯拙くして、原書の趣味は其半以上を失ひましたが、唯面影を止めたい計で。

イリヤ、イリイチが、朝早く、あどけない、さゝやかな床で目を覺しました。此子は今年僅に七歳で有ます。淡々しいおさな心には、何となく快く面白いと見えます。此子はまあ何といふ美しい、可愛らしい、ぱちや〳〵と肥た好い子でせう。他のいたづらッ子などは、態と腮れて見せたとて、なかなか斯丸々とはしませんよ。乳母はもう疾から此子の目を覺すのを待て居ました。其中に目を覺したので、靴足袋を延して穿せやうとしました。所がもういたづらな、足をばた〳〵とさせて居て、なか〳〵捕へさせません。其をやッと捕へましたが、顔を見合せておほ〳〵と二人は面白さうに笑ひました。可愛らしいこと。足袋を穿せ終ると、乳母はやッとかゝへ起し、顔を洗つたり、髪をかいたりしてやッて、母の所へつれてゆきます、母はさも可愛らしいといふ風に、此子の顔中を接吻しました。そして何處も何ともない歟、目でも曇ッては居ない歟、と案じる様にじッと見廻して、何處も痛くはないかねと尋ねて、そして又乳母に向て、昨夜は靜によく寢た歟、夜中に目でも覺しはしない歟、熱でも出はしなかッたらう歟、と尋ねました。其から手を牽て聖像の元へ連ゆき、片々の手で此子を抱へながら、さお母様の後に継でお經をお讀よ。おさな兒は母のいふ通り、經の句を淡々と繰返しながらも、青葉の匂ふ涼しい窓の方を見ながら、ふと思ひ出した様に、ねえ母様、今に運動に往かうね、と言ひます。あゝ往かうよ、と母は周章て言ひながらも、目は聖像より外へうつさず、急いで經の句を續けます、稚兒は無心で、あどけなく其句を繰返すのみですが、其代に母は自分の精神を全く其中

に凝して居ます。經を讀み終て後は、父の方へ伴てゆき、其から又茶を呑にゆきます。

オブロウモフ（イリヤ、イリイチの姓故、つまり此子の事です）は、茶の机の周圍に於ては、始終口小言を言て居る、大變年寄の、今年八十歳になる伯母樣、と其召使の、之も年寄で、始終頭のぶる／＼とふるへて居る婆々の、うろ／＼椅子の周繞で週旋て居るのを見ました。其他まだ此處に、父方の親類で、遠縁なる三人の中年婦人、と此頃食客をして居る父の弟で、少し氣の偏な七人持の領主のチエクメエチフと、そしてまた何處歟のお爺樣達や、お婆樣達が居ました。總て是等オブロウモフ家の人達と而して從者とが、イリヤを手車にして、此子を賞たり、甘やかしたりするので、此子は接吻の爲に濡るゝ頰を、ふく閑もない程で有ました。其から此子をぱんや、果物や、菓子で養ッてやり、又其上にも母が可愛がッて、やさしくしてやッた後、漸やく庭や、外庭や、野へ遊びに出します。然し其も乳母に言ひ附て、此子を一人打棄て置事のない樣、又馬や、犬や、鹿の傍へなどは放してやらぬ樣、又家から遠くへは往ぬ樣、そして第一は此近所一番の惡所として、惡い評判を取た洞の邊へは、決して決してやらぬ樣にといふ嚴しい言つけで遊びに出します。そして此洞といふのが、どの樣な惡所塲歟といふと、其は何時歟中よく來た犬、あの例の、人の斧や熊手をふり舞して見せると、直逃るといふ爲に、狂犬だと言はれた其犬の影が、此洞の傍でちらりと見えたのが、ふと何處歟山の向うへでも往て仕舞ッたもの歟、忽ち消て見えなくなッたといふ事や、又盜賊や狼が居るといふ事や、其他まだ種々の怪物、其は何處歟の遠くに居る、若くは全く此世にはない樣な、種々の怪物が居るといふ惡い評判を取た所です。

をさな兒は母の注意を終まで聞ては居ません、もう疾

に外庭の方へ出で居ます。イリヤは我家を、少し横の方へ傾て居る門のある、家根の中央を板葺にしたのが朽て、柔かさうな青苔の生て居る、ゆら〳〵と搖れる階子の繋て居る、其他種々の雑作もあり、又古風な庭も附て居る我家を、とんと始てゞも見た樣に、さも吃驚した風で見廻はしましたが、さも嬉しさうに其周圍をかけ廻ッて居ます、此子には家中の人を閉口させる廊下へ、恐ろしくかけて往たくなッたのですよ、其處から小川の流を見やうと思ッて。然し此廊下は大變朽果て、やッと持て居るのですから、召使の外は往く事が禁じてあるので、旦那方で往く人などは有はしません。其處へ又此子が往たくてならないのですよ。イリヤは母の戒を忘れて、もう少しで罪造の段階子に足をかけやうとしました。所へ乳母がかけつけて、やッとつかまへて仕舞ひました。然しイリヤは少しもじッとしては居ません、直其手の下をすり抜て、もう稲小屋の方へ飛んでゆきます、嶮しい階子を匍匐登らうと思ッて。乳母が周章て其後を追て、やッと稲小屋へ來る頃には、もう又彼方の方へ、それで乳母は又其後を追て鳩小屋へゆき、其から又此子が藁小屋へ潜るのを止なければなりません。嗚呼さうはせいとうが續かない、まあどうしませう此お子を、此おいたを、どうぞ神樣お守り下さいまし、あの洞の方へ往かない樣に、さあ坊ちやま、少しおとなしくして、じッとして居らつしやいよ、外聞がわるうございますよ其樣にかけまはッては、と乳母が言ひました。

實に日がな一日、晝も、夜も、乳母は驚いたり、走ッたり、又泣たり、笑ッたりです。或時は大事の此お子が轉んだので、鼻でも打はしなかッたらう歟、と吃驚したり、或時は此子のあどけない、露僞りのない、小兒らしいやさしさで慰められて、しみ〴〵と嬉しくなッたり、或時は此子の行末を案じわづらッて、うつら

うつらと物思ひに耽つたりするが、唯まあ此樣事の爲め計で、乳母の心は波打て居るのです。唯此樣波のある計で、老たる乳母の血は温に、夢幻の樣な老朽た生命が、やッとまあ持て居るのです。

然し穉見はさういたずら計をしても居ません。時によるとふとおとなしくなッて乳母の傍に坐り、じッと周圍に起る事柄を見詰て居る時も有ます。愛らしい此子のおさない智慧は、目の前に起る總ての出來事をつくづくと觀察するのですよ、そして其出來事が此子の心にしみ〴〵と染込んで、そして此子の育つのと共に長じて、そして果を結ぶので有ます。

何ともいへぬ程莊嚴の朝で有ました。空は清々として涼しく、日もまだ高くならぬ中で、家からも、樹々の梢からも、鳩小屋からも、廊下からも、其他總ての物から、影が長々と走る樣に落て居ます。そして庭や外庭には、物思に沈ませ、夢を忍ばせる樣な涼しさうな影が、此處彼處の隅々に幾つともなく見えて居ます。唯影の無のは、稞麥の一面に生じて居る野面が、旭日影に輝て居るの、とそして小川の水が眩き計、きらきら光を流して居るのと斗です。なぜ、乳母、此方はまだ暗いのに、彼方は彼樣に明るいのだらうあれ、彼處ももう明るくなッて往ッた、何故だらうね、と穉見は尋ねました。あれですか、あれはお日樣がお月樣をお迎にゆくのです、そして出遇はないものだから、あの樣に顔を皺めて居ますの。其中、あれ、遠くの方へ見えたものだから、あれ、彼樣に明るくなるのです、と乳母は言ひました。

穉見はじッと考へて、そして始終諸方を見廻して居たが、其中にふとアンチブ(僕の名)の水を汲にゆくのを見附ました。見れば不思議にもアンチブと並んで、地上を十倍も大きい他のアンチブが往ます。そして水汲樽の大きさと云ッたら家程もあるのです。そして馬の

影と言ッたら、野を一面にかくして居ます。あれ、影はたッた二歩野を歩たヿですが、それだのにもう山の向ふへ往て仕舞ひました、然し眞のアンチブは、まだ外庭をさへ出きりませんのに、穉兒も同じ樣に、二足前へ進んで見ました。又もう一歩進んで見ました。あら、自分の影ももう山の向ふへ往てしまひましたよ。それでおさな心に急に山の方へ往て見たくなりました、何處へ馬が往たらう歟と思ッて。斯思ッてイリヤは一散に門の方へかけて往ました。然し此時はもう窓から母の聲で、乳母、御覽な、イリヤが日向へ出て居るではない歟、日影へつれて往ておくれな、日にやけると頭が痛くなるよ、氣分がわるくならあね、何もたべられなくなるよ、眞個に困るねへ、お前に預けて置くと、今に洞へ落すから、と言ひました。あゝ又甘やかしッ子歟、と乳母は靜呟やいて、イリヤを階子段の方へ伴てゆきました。穉兒は四下を見廻して、大人の人達が、何を朝の中はして居る歟と思ふ樣に、覺えやう、呑込まうといふ樣な鋭い目附で、人々の仕事を見て居ます。そしてどの樣な些細の事も、どの樣な人の擧動も、此子の經驗を積まうといふ注意から見遁されません。そして此樣な家庭の摸樣畫が、しみ〳〵と此子の心に染込ます、生た實例となつて殘ります。そして此子は又其身の周圍の生活によりて、無意識の間に我生活の雛形を描いて居ります。

女優の摸範

(佛國のサアラア女史)

黄　花

洋劇をいへば先づ佛國を思ひ、佛劇を云へば先づサアラア、ベルナアル女史を思ふ。當時歐米諸國伎倆姿色を以て鳴るの女優少なきにあらざるも、劇界女帝の冠

は確かにサアラァ女史の頭上にぞあらむ。

女史本名はダマラ夫人。ロヂンと云ふ。一千八百四十四年巴里に生る。父は佛蘭西母は和蘭の生れにて、共に猶太人の血脈なり。女史幼かりしほどは和蘭の都アムステルダムに眼鏡作りて渡世しける祖父の家に育ち、後佛蘭西に歸りウェルサイユの尼寺にて敎育をうけにき。

女史頃ろ人に語りて曰く、妾は神經質の子供にて、其頃より演劇に熱中しぬ、十四歳の年妾は尼にならずば俳優になるべしと獨り言ちしが、終に尼寺を去りて巴里の音樂學校に入りたり、入學試驗の時、妾はラ、フォンテンの昔話を巧みに暗誦せしも、今一つ暗誦を試驗せられて失敗せり、されどもしらるゝところありて入學を許され、斯くて妾は美辭學敎授プロボス及サムソン兩氏の弟子となりぬ」と。女史は十七歳にして悲劇の第二等賞を得、翌年更に滑稽劇の二等賞を受けたり。出世の準備此に於てあらかた成りぬ。

女史が初めて女優として出勤せしはフランセイ坐なりしが、藝未熟にして人氣露ほどもなく、餘儀なく舞臺を退きぬ。後ヂムナーズ及ポルトセントマーチン坐に出勤し、道化役をつとめしが、此時までも左まで評判なかりき。然れども意地强き女史の事とて、失望の色もなくいよ〳〵出精し、一千八百六十七年正月また大劇場にいで一寸したる下役をつとめて初めて喝采を受け、「ライブラス」の劇にてマリドニユーボルブの役を演ずるに及びては、女史の天才は旭日の如く輝き出で、程なくさきに失敗して退きしフランセイ坐に呼び返されぬ。是れより女史の伎藝は年々月々熟達し、後しば〳〵英國南米北米露獨各地を遍歴し、到る處伎を練り名をあげて、サアラァ、ベルナァルの名は劇場より巴里に廣まり、佛國に廣まり、歐米に廣まり、佛國にサアラァあるを知らざる者なきに到りぬ。女史初めは

フランセイ座にありしが、後同座と絶つて破約金四千磅を拂ひ、爾來大概ポルト、サン、マーチン坐にありき。一千八百九十年の秋女史が演したるクレオパトラ、及同年務めしジヤンヌダアクの役の如きは、未曾有の出來にして美術社會を狂奔せしめたり。女史今や五十一歳、元氣盛にして容貌また衰へず。萬藝通達の中にも悲物に到てはラセル以後の一人と稱せられ、「神々しきサアラア」の名は、劇界の月の女王の如く仰望せらる。一たび音樂學校の入學試驗に失敗し、また劇界出陣の門出にフランセー座に失敗して退塲せる少年の失意女優は、今や文世界劇場裡の女帝となりぬ。女史一千八百八十八年希臘俳優ダチアンに嫁せしが、程なく離婚して、爾來全身全心を劇に捧げたり。

抑も女史の斯る位置に達したる迄には、失望も失敗も少なからざりき。女史の天才は甚だ高しと雖ども、其忍耐素養は實に女史をして今日あらしめたり。女史頃ろ人に語りて曰く、妾云々の役を受持つ時は、まづ第一に其人物の智性を研究し、手に入る限り其人物に關する解剖批評をよみ、もし歴史的の人物なれば、これに關する凡ての傳記一代記、卑近なる逸事逸話より、詩人の手になる昔話などに至るまで悉皆よみつくし、自ら眞に其時代の人となりし樣に感ずるまでは、其時代の文學、空氣に身を浸す」と。

また曰く、若し役者自から吾扮する人物の悲哀、失望、苦痛及花の感情を實際吾身に經驗し得るにあらざれば、決して之を外にあらはす能はじ。伎の優劣は感情の度如何による。自ら深く感ぜずして如何でか人をして我を忘るゝの感を起さしむるを得んや。自ら感じて演ずるときは同じ劇たとひ五十日百日續くとも、見物人に及ぼす勢力は少しも減ぜぬものなり。妾は佛語を知らざる見物人の前に芝居すれども、何處の國人もよく妾を解す。妾はまた常に人物を研究す、逢ふ人毎に

研究す、妾は常に實際の人を觀察す」と。俳優社會は東も西も兎角無學にして不注意の癖あるに、流石は抱負大なる才力秀れし女史の見識高しと云ふ可し。女史は意の人にして亦尤も感の人なり。幕の開かんとする前、化粧室にいつて、今演ぜんとする役を一心に考へ込み、衣裳つけしまゝ一心に思ひつめて涙ホロ／＼頬にながるゝほど感情にせまることありと。此才、氣、注意、考思、研究、感情を以てす、女史がヂャンヌ、ダアクとなり、クレオパトラとなり千年數百年前の歷史の人物を今見る樣に活かし出すも當然と云ふ可し。

女史、又曰く、妾は常に此度の手際は前よりも落ちはせずやと掛念し、心常に安からず、但妾は同情なき見物人にしば／＼出逢ひしが、妾は其には頓着せず、却て變化ありて興ありき、斯る場合には見物人と妾との合戰にて、勝は常に妾に歸したり」と。女史が膽太く、然も日新の氣象盛なるを見る可し。

サァラァ女史は活歷派の人なり、衣裳に於ても甚だ虛飾を嫌へり。嘗て人に語りて曰く、妾は舞臺にいろいろの作り物、近つきて見られざる粧飾、所謂實際ならざるものを用ふるを嫌ふ。また妾の運動自在に身足の輕き所以は斷然コルセットを廢したるによれり。すべて女優は身を束縛し運動を妨ぐる如きものをさくべきなり』と。

才すぐれし氣力ある此奇女子は、また實に親切なる婦人なり。また實に多能なる婦人なり。女史はまた文筆の才に長ず。一千八百八十八年「ル、アビゥ」てふ一幕物をかき、佛國アカデミーより名譽賞表を受けしことあり。又彫刻家の譽ありて、嘗て佛國の美術展覽會に大理石像黃銅像を出品して褒狀を得たり。『世には卑き業なし、唯卑き人あるのみ』。サァラァ、ベルナァル女史の畧歷は、何事を吾等に敎ふるか。

文藝

恐ろしき一夜（上）

蘆花生

九月三日の夜、空大海の如く晴れて、陰暦七月十五夜の月いと明きに、燈消して椽先に端居す。眞黒き前栽の木立の間より月光霜の如く漏りて、薄墨の繪の樣なる木の葉の影疊に散り、虫の音近く足下に起り、誰家の少女の手すさひか月に奏づる琴の音いと優なり、心を清夜の靜寂に浸して、月に向へば、風冷やかに衣を吹きて、秋、身にしむ。ア、秋風吹き秋月明らかなり、里の女が夜ふけて衣擣つ時節も遠からじと思へば、思はず思ひ出づるは、

『夜は寒くなりまさるなり唐衣
　うつに心の急がるゝかな』

嗚呼是れ十九年前、明治九年霜冴ふる十月二十四日の夜、肥後銀杏城下に血の雨を降らせし神風黨の巨魁大野鐵平が歌にあらずや。惜む可し好漢、彼の支ふ可からざる時勢に抗せんとして、自から斃れぬ。

何れの國何れの時代に於ても、進歩の風潮急なれば、保守の岩礁頑として其衝に當る。海は萬能なり、潮は全能なり、其澎湃として進むに當ては、如何なる岩礁も沒せずんば已まじ。然れども其汪洋たる波の岩を埋了する迄は、怒れる岩礁の波蹴かへして白沫を飛ばすものそれ幾何ぞ。維新初年の日本史は、實に此衝突より起れる悲劇に滿てり。神風黨の如き、實に凄まじき其一例にあらずや。

彼等は實に封建武士の好所短所を代表せる者なり。敬神は彼等の宗教也。忠君は彼等の主義也。攘夷は彼等の素志也。武藝は彼等の日課也。剛毅質直は彼等の道德也。節操淸肅は彼等が婦人の生命也。彼等は實に封建

社會に於て初めて棲息し得るものなりき。

維新は來れり。聖天子は九重雲深き平安の內裏より日の如く日本に輝やき出で玉へり。神祇省は太政官七省の頭に置かれぬ。彼等が敬神勤王の心に慰められたり。然も此は僅かに一瞬の間なりき。滔々たる維新大革新の風潮は、片端より舊習故俗を掃蕩し行けり。彼等は次第に孤島の間に閉ぢ籠めらるゝを見出しぬ。反抗の精神は次第に燃へ來れり。廢刀の令下れり、彼等は常に袋刀を提げて往來せり。斷髮の令下れり、彼等は依然髻を結んで往來せり。電信架せられたり、彼等は扇を翳して其下を過ぎれり。彼等が尊みて仰ぎ覗し藩侯は、彼方より其位置を下りしに引易へ、彼等が塵芥の如く下し見たる穢多平民は、見す〳〵上つて己に伍せむとす。懷かしき昔は日に〳〵遠くなり、彼等が生計は日に〳〵寒くなり來れり。藤肥州以來二百餘年、屹として九州の鎭となり彼等が日夕仰ぎたる銀杏樹雲の如き熊本城には、洋服洋劍洋銃の兵士士官蟻の如く群がりて、彼等が祖先以來常に時を報ずる大鼓の音を聞きし城樓よりは、忌々しき喇叭の聲時を得たり氣に鳴り響けり。病院建てられたり、異人臭き醫術は一般に廣まれり。洋學校成れり、城下の子弟は髮を斷ち横文字の書を採り碧眼紫髯の異人の膝下に聞くも胸惡き夷狄の文字を囀れり。城下の民は日に〳〵洋風に染み、輕薄になり行けり。彼等は悲憤の眼をもつて時勢の日に非なるを見、身は孤岩の如く滔々たる風潮の中に立つを見、憤は胸に煮へたり。アヽ夜は寒くなりまさるなり、世は澆季になり行くなり、唐衣、洋風夷俗、擣たでやは、擣たでやは。アヽ唐衣、うつに心の急がるるかな。

彼等は一齊に打たむと決しぬ。誰を打つ可き。革新の風潮に形なし。彼等は縣廳を睨めり、新政を敷き、新事を與す ものは彼れなり。彼等は鎭臺を狙へり、濫

りに洋式の兵となるのみか、婦女に戯れ、酒を被り、傍若無人に風俗を腐らすもの彼なり。彼等は實學連の頭株を睨めり、新事物誘導の緒を開くものは彼なり。彼等は久しく狙へり。同志の間の往來はいよ〳〵しげくなれり。半夜竊かに燈下寶刀の刃を見たり。殺氣隱隱として銀杏城下に籠りぬ。神風黨不穩の樣子縣廳の耳に入り、重立たる縣官今夜縣令の宅に集りて協議す可しとの報は神風黨の耳に入りぬ。機一發、先ぜんか後れんか。

明治九年十月二十四日、秋の夜深けて、滿天の星の光刀の如くすさまじく、城下の人士夢まさに濃やかに、長官種田少將は泥醉して新妾と臥し、縣令の宅には一基のランプ密議に鳩めたる縣官四五人の顏を青く照らせる二更の頃ほひ、二百餘人の健兒、城の西南樹墨の如く黑き段山藤崎八幡社殿に集り來れり。腹卷小手脛當に、烏帽子直垂の者あり。髮振り亂して、白綾の鉢卷したる者あり。色黑く髯逞ましき丈夫あり。十四十五の花の如き少年あり、傳家の寶刀は腰に横はり、雪の如き襷は十文字に衣の袖を絞り。社の神官渠魁の一人たる加屋は、神前に跪きて、衆に代つて拜念し、彼等の兩人は霜の如き劍を拔いて神前に舞へり。拜は終り、劍の舞は終りぬ。三通の大皷鳴れり。首魁大野、加屋、上野、社殿の石階に踞して部署を定めぬ。一隊は縣令安岡の宅へ。一隊は鎭臺司令長官種田の宅へ。一隊は中佐高島、大島、兒玉の宅へ。一隊は實學黨の太田黑の宅へ。一隊は縣廳へ。本隊は鎭臺へ。

時三更に近く、風露滿天、銀河空に横はり、霜白く、風寒し。『夜は寒くなりまさるなり、唐衣、うつに心の急かるゝかな』。二百の健兒、霜を蹈み枚を啣むで藤崎社頭を出でぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

吾家は熊本の東郊にあり。鎭臺司令長官種田少將。高

島中佐等の寓居とは、一條の小川を隔て、數畝の圃を隔てゝ、夜は咳嗽の音も聞ふるばかりなりき。

十月二十四日の夜、吾等は晩くまで睡らでありき。姉上病重く、危かりければ、母上を初め多くは枕邊にあり、醫師も通夜し居たり。夜の更け行くまゝに、霜氣鐵の如く膚に迫り、枕邊の行燈の光チラ〳〵として、當時九歳の吾は眠るともなく母上の膝下に眠りこけぬ。忽ち耳元に母上の聲して、吾は蜜柑の山の夢より呼び醒まされぬ。此は母上の姉君に向ひ、「お○さん、苦しからうけれども、一寸の間呻吟かずに居てお呉れ、何樣たゞならぬ音だから」と云ひ玉ひたる聲なりき。聲終らざるに、川向ふの方にあたりて怪しき物音、姉君の呻吟の聲に間りて聞へぬ。姉君は唇を嚙むで默し玉ひぬ。吾は一身耳になりて傾聽す。忽ちばた〳〵足音聞ふ。頓て咽突るゝ鷄の苦む樣なる一ト聲、糸の如く長く曳ひて靜なる夜に響きぬ。一瞬の後、忽ちァッと一ト聲女の聲して、其聲のパッタリ止むと思へば、更にヒーイと一聲悲鳴の聲悽く耳を貫き、ばた〳〵足音響き戶障子の倒るゝ音して、其後は截つたる樣に靜かになりぬ。

母上は色眞蒼になれる年若き醫師を叱り勵まし、帶引しめて『御身も男でやないか、來て御覽』と言つゝ、余が右の手を執て引き立て、二階に上りて、北の雨戶を一枚ガラリと引明け玉へば、此はいかに、背戶の竹藪越しに空は一面朱の如く焦れたり。城の方を見れば、彼處にも火あり、此方にも火あり、火は一時に五ヶ所に燃へ、焰は五ヶ所より分れ上りて、紅く空を烘り、竹藪の笹の葉も黒く分明に數へらる。耳を澄せば、何とも知れぬ物音騷がしう火焰の間に聞ふ。



比喩談

湘川漁夫

榮螺と時勢

榮螺何事につけても己が家の自慢をなし、海の中を自由自在に游ぎ廻る魚類を常に無頼者、放蕩者又は浮浪の徒とさげすみて、罵り嘲り、海中風起り浪立ち、世間物騒がしき時は、身を潜め、固く蓋を閉ぢて、我家の永久萬々年安全なるを喜び、己が身を守る事の外は、他事はすべて見ることをも、聞くことをも、皆うるさしとて厭ひ居りしが、何時の頃よりか人來りて海上に堤を築き上げ、ポンプにて水をかいだし、傍の山を崩して頻りに土石を運び入れ、埋立工事に忙はしかりけるに、榮螺は始の程は、事の直ちに己に關係なきを見て、曾て見ざりし電信線の幷び連なり、蒸氣列車の絶間なく往來するも、別に心にも留めずして打ち過ぎ居りしが、愈己が世界なる海水も干上がりて、食を得る道にも困じ來り、安全と思ひし我家の、安全ならざるを漸く悟り、首を出だしてあたり四方を眺め回はせば、時勢は既に全く變りて、身を處すべき法もなく、昔の仲間なる魚等の早くも逃れて居らざるに氣付き、我が後れたるを歎きはじめしとき、一聲人の掛聲のきこゆるや否や、忽ち天地も崩るゝ程の音して、其儘土の下に葬られけり。

安逸を貪る者は世に後る

船長の苦心

一艘の駛船、高く帆を揚げ、黒烟を吐き、浪を蹴立てて、勢好く走り行き、船中の乗客は、一同最上の元氣にて、詩を吟ずるもあり、歌を謡ふもあり、高らかに笑ひ語るもありて、はやさして行く港も程近かりけるが、遙かに岸を隔てゝ、簇霧立ち起り、方向を見定め兼ね、船長は暗礁を恐れて、しばらく舵を留めんとせ

しに、船客は或は陸の近きに氣を得、或は海圖を開いて航路の安全を確かめ、或は用心深き船長の臆病を笑ひ、ガヤガヤとやかましく罵りて、せんすべもなかりければ、船長は心ならずも船を進めしが、案外にも、容易く暗礁の間を潜り拔け、向の山もありありと現はれ見え來り、最早氣遣ふ程の事もなしとて、今は却て船客に對ひ、己が技倆の優れたるを誇り始めける時俄かに大陸の方より、狂風吹き來り、看る間に天候變じて荒波立ち上がり、船は吹き戻されて、暗礁の上に推し上げられんとせしかば、船長は船員に下知し、必死となり、碇を切り捨て、漸く免れ出でしに、船客は又復承知せず「船長の職としてかゝる困難の場所に、船を乘り入るゝ事やある、なにとて地理に暗く先見の明なかりし」、「曩に既に惡念ありたりとせば、船客の意見に動かされずして、何ぞ自ら決斷せざりし」、「船長は乘客の生命を危うし、其職務に堪へざれば、宜しく其責任を負はしむべし」、など、口々に怒り罵り、中には、眼前に陸を見て退く程の卑怯者やある、船の破損を厭はず、風に逆らひ、一直線に進めは、進み得たるなるべきに」と慷慨する者もありて、皆頻りに船長に逼りければ、船長は歎じて「世人の論は風の方向に隨つて變ず」と獨言しけり。

大事は宜しく本心に隨つて判斷すべし

筆 と 鋏

筆の力は劍の力に勝るとて、硯箱の中にありける筆、得意に己が世に効用の多きを説き語り居りけるを、鋏はきゝて冷笑ひ「さる聞き苦しき事はいはぬものなり、君の力の劍に勝るや否や、そは能く知らされど、我が見る所にては劍は愚か、爭か我にも及ぶべき、君は僅かに小冊の書物を著はすに多くの月日を費やせど、我は切拔を集めて瞬ぐ間に大卷を作り得、しかして書舖にては、君が著作より我方の割合に價の安くして、、却

て賣口の多きを賞美するなり」とて、筆を制しけるに傍にありける糊壺の糊も、鋏に同意を表しければ、筆は潜かに歎じて口を箝みけり。

創作は剽竊に功を奪はる

熊と獵夫

荒熊山奥より出で來りて、人を傷け、牛馬を殺し、作物を荒らし、損害甚だしかりければ、村役所より布達を發し、賞を懸けて、熊打を募り、二人の獵夫之に應じ、直樣仕度を調へ、足迹を目當に探り行きけるに、林の此方にて、ひたと出合ひ、大熊は怒りて哮り狂ひ、飛び懸りければ、此勢に僻易して、一人の獵夫は、其友を捨て鐵砲をも投げ出だして、素早く木陰に隱れ、息を殺して潜み居たりしに、他の一人は避くる暇なく、直ちに一發切つて放ち、熊は痛手を負ひて、益々荒れ狂ひ、獵夫は鐵砲の臺にて打ち敲き、しばし挑み合ひければ、木陰の友は、樣子如何にと、恐々首を出だし、其友の戰ひ居るを見て、稍元氣を得、遠くより「それ左を打て、それ右を拂へ」など、言を添へたれど、只聲を發するのみにて、尙も出で來らんとせず、遂に双方疲れて、其場所に斃れたるを能く能く見濟まし、捨てたる鐵砲を拾ひて、のそのそと近寄り、死したる熊を二三發續け打に打ち、己が身に作り傷をつけ、血を濺ぎ、兩人にて大熊を仕留めたりとて、役所に屆け出で、多額の恩賞を得て、末長く榮えけり。

人の功に由つて賞を受くる者多し

椎の木

藤島ゆき

雨は降りつゞきて月の半をすぎぬ。猶いつやむべくも見えず、いよ〳〵すさまじく降りしきりぬ。去年のうれひにおそれて、一村の人々皆安きこゝろもなく、富

める人はいづこにものがるべけれど、あはれ賤しきものどもは、いさゝかの家財さへかへりみるいとまなく、只管のがるべきみちを神佛に念ずるのみ。晝のころ少しく風ふき出でたるに、雨もやう〳〵靜になりぬ。村のはづれにひくき家あり。くちはてたる軒端にたゝずみて、十六七とおぼしきをのこは九つばかりなる弟をよびぬ。きたるつゞれぎぬはいともみにくけれど、おもわよく似かよひて、共にかしこげにみゆ。『絶間なき雨に、藥師がり行くをいたくおこたりぬ。母君のみけしきも今日はいとよく見ゆるに、まゐらするものたゆみて又苦しみます事のありなばいかにくやしからん。今のうちに急ぎゆかばあやぶき事もあらじ。母君きゝ給はゞ、をち君の御もとに少しものきゝに行き侍りつといへ。たなの上なる飴もなにも、おしこにおきつれば、よき時にまゐらせよ』。弟はうなづきながらされど兄君、われゆきてん。急ぎゆかばわれの方早からん。昨日人來てけふにもあやふしといひつるをきゝぬ。兄君いまさずは母君を如何にせん』。否弟よ近からば汝にてもよからん。雨に道さへなかるべければいとあやふし、程もなくかへり來む。そこなるわらじ持て來よ』やをら兄は門に立出ぬ。なほふりかへりざまに、『ねぶり給へば、妹といさかひなせそ』。兄の出ゆくうしろかげをまばし見おくれる弟の愛らしき目には、泪あふれてせばき袖にあふれおちぬ。折からふすまのかげにせき入る聲すれば、驚きて走り入つ。やがてをさまれるにやあらん。八つ計りなる小さきをみな子の出來て、棚の上なるものとらんに、手さへ足さへある限りさしのばせど、猶取りえぬ樣なり。『妹よ、餘りに高きところなれば、我取りてん。汝は水まゐらせよ』。『否われとても、兄君と同じ年にならば、なほうへの兄君の程にならんには』などいふあれ母君のよびますよ。水もいまわれ汲みてゆかん』をさなき兄妹は心のかぎり撫

でつさすりつすれど、母はせきにせきあげて、息もたえ〳〵にみゆ。やう〳〵『藥を』といへど、藥は一滴もなくなれり。あはれや幼子はこたへだにえせず、しばし泪ぐみゐしが、ふと心づきたるさまに、かたへなる水を小さき湯のみにつぎてのませぬ。藥とおもひてや、少しおもゝちよきやうなり。なほくるしげなる聲に、『兄はいかにいづこに行し』ととひ出ぬよき樣に答へたれど、母のけしきはいとゞくるしげなるに、兄さへ歸りの心もとなく、堪へがたさに門にたちいでゝ見れば、人の叫ぶ聲いととほくきこゆ。何事となほよくきけば、泣さけぶ聲いとものすごし。さてこそ水の出來つるよと、走り入りたれど告くべき兄はゐず。母は病めり。妹はいふかひなく幼し。『あれ〳〵すさまじき聲するは、水のいとちかくよせ來るならん。さても如何にし給ひけん。まげても先に我ゆかば、よしやわれはおぼるとも、母君と妹とは兄君の助けまさんを。如何にせん幼きわれには』と、うちかこちつゝおのが門べを立出ては入り、また走り出づるに、いとちかき家々にても、人々まうけするさまなり。彼岡にのぼらば姿や見えむ。否々岡はいと遠し。彼椎の木のわたりまで行き見なば、影だに知れむ。母君に告げてゆくべきか。否なか〳〵にあしかりなんと、只管兄をまちわびて、少しはなれし椎の木のもとにたどり行くすがたよ。髮はおどろのごとく風に亂れて、折々こぼるゝ雨は、わゝけたたる袖にかゝれり。

いかれる如き水は、村人がふせぎにふせぎし堤一つをおしやぶりぬ。二の堤もいとあやふし。たのむは三の堤のみ。救ひの舟はこゝかしこに出ぬ。此處は住家すくなきところとて、大方の人は、のがれて舟に乘れり。舟の中には病める人も、幼なき女子も見えつ、雨は全くやみぬれど、狂へる風にうづまく水は、あら磯の岩ほに高き浪の打ふれてくだくるが如く、漕ぎ行く小舟

をおしながしぬ。『あれ〳〵あしこの木の上に人の見ゆるは、舟やりて救へよ』とひとりのいへば、『尋ぬる幼子にやあらん』と口々にのゝしりさわぐ。われかのけしきになやめる老女は、いづこにぞとからうじてかしらをもたげ、をみな子は小さきをゆびに指ざして泪くむ。楫とれるをのこは、力の限りすゝめんとすれど、水かさいよ〳〵まされるに、舟はこげども〳〵近づかんすべなし。早くも水は椎の木の半より高まれり。『あはれ天つみ神。わが身は此處におぼれしすとも、病める母君いとけなき妹を助けさせ給へ。救はせ給へ。はた兄君の身をまもらせ給へ。あれ〳〵彼處に見ゆる舟は、兄君や乘する。なつかしの兄君よ、われは此處にて兄君をまてり。』いと嬉しげに舟をまもれど、水は今幼子の足をぬらせり。折しも後のかたに見ゆる舟の中より、たえ〴〵に叫ぶ聲のきこゆるは、兄の聲に似たりけり。いとよくきゝしりて、『あれ兄君よ、嬉しや』と吾身のあやふき事もわすれはてつゝ、幼子は枝にとりつきのびあがれり。よせてはかへす大浪に、あなたの舟はいとかるげにゆられ〳〵て、ゆくへも定かならず。こなたの舟もやう〳〵にいとちかくよるよと見えしに、あはれをさな子はいづこにか行し。かぎりなき海原は、田も畑も堤も見えず。唯椎の木の上つ枝のはつかにみゆるのみ。

征衣の露（二）

在臺灣　松琴生

○草むす墓（中壢のほとりにて戰死者の墓に詣でゝ）

皇國のみためにと　立ちしいさほのしるしだに
あらのゝ末の柳影　並ぶ墳墓數幾つ」
草むすかばね兼てより　心定めし大丈夫の
魂かあらぬか蝶の　梢に迷ふ樣あわれ」

名のみ止めて夏草の　しげみの下にはかなくも
露と消えつゝとそへに　覺めぬ夢にや眠るらむ」
朽ぬほまれをたゝへつゝ　鳴くか草葉のくつわ虫
行きつもどりつ燕の　弔ひ貌もしのばるゝ」
訪ふ人もなきまゝに　墓のべいたく荒れはてゝ
風に散りしく白露の　おのづからなるあかの水」
たへぬ思ひに沈みつゝ　つゆ置きそゆる花薔薇
つぼみの枝を手折りつゝ　心をこめて手向草」

○野路夕立（新竹へゆく道すがら夕立にあいて）

暑さはげしき夕まぐれ　仇のとりでを見ざしつゝ
進み行手に天雲の　むかふす間よりいかづちの
なりはためきて夕立の　篠つくごとくおとし來ぬ」
たのむ木蔭もなきまゝに　まとへる衣もそぼぬれて
肩にになへる村田銃　腰におびぬる日本刀
流るゝ露をはろふべき　よすがもあらぬ野邊の路」
露置きまさる夏草の　しげみにしばしやすらへむ
いつしか雲もはれゆきて　今はとのぼる月かげの
青葉の山にてりそへて　光りすゞしくてらすなり」

家政

家內の喜と憂（中）　しばのや

一、家人の中央に居りて滿足する能はず遂に「ホーム」の外に出でゝ其喜を求むる者は哀れとや云はむ

二、其赴く處の何れなるも交際するの人は皆他人にして又自己の「ホーム」に於ても他人行儀の心地を覺へん

三、其心中に感ずるの痛苦は自ら隱慝せざるべからずして一人の之を慰藉し呉るゝ者もあらじ

四、其喜を他人と分ち見よ其返禮に受くるは難有しと云ふの聲に過ぎし

五、毎日面白しと感ずるとなければ不遇を訴へ小兒の來り取圍むあるも實のなき荊棘に均し

六、夫と婦、親と子、兄弟と姉妹との間を連結する血縁こそ此世界にて最も親密且貴重すべきものなるも愛情の存ずるあらざれば此珍寶も何にかせん

七、諸々の辛苦と心配の後ち大の字になりて躰を舒ばし意志を安んずるは「ホーム」中に於てするより他に氣樂なる處はあらじ

八、汝の頬汝の額より流れ落つるの汗を拭ふの手は婦の手こそ最も適當なれ

九、勉强なる主人が世の濁浪中に浮沈するは皆家族の爲めに安寧と快樂とを求めんが爲めぞ

十、而して其日の課業を終はりし後ち鶴首して待ちつゝあるの愉快なる社會に歸り樂き謝詞を耳にするは神使の福音と何ぞ異なるあらんや

十一、全世界は主人の誰れなるやを忘るゝとあるも「ホーム」は一人として主人を忘却するものあらで其外方に於て收めたるの利益は忠實の主婦に依りて節儉せらる

十二、主婦は大小に論なく萬事に注意して「ホーム」的幸福の芽萠を養護す

十三、家族の爲めには親き同情を表し人毎に其好むが儘に交りて之をして日々の勞苦をも忘れしむ

十四、小兒は兩親の家に於ける狹き區域内にて無邪氣に戯遊せしめよ

十五、小兒の第一の寶は喜ばしき從順にあれば兩親の良好なるなれば愛すべき尊敬を以て之を慕ふに至るや必せり

十六、婢僕とても幸福者の一團に入れ忠實なる心情を以て心配し呉るゝの主人主婦の爲めに盡さんとするの心念を惹起せしめよ

十七、彼等に臨むには統御者たるとなり慈愛ある新き

兩親たれ「ホーム」を笑ましむるの事は亦彼等の樂み喜ぶ所なり

十八、相互に愛情を以て交際すれば日常の事に就き驚くべきの刺戟を與へ極めて瑣細なる者にも高き價値と深き意味とを附す一人の憐むあれば皆集りつどひて之が看護を爲し個人の幸福は一同の大事件なりと信ず

十九、ホーム的喜は極樂なり、其不和は地獄なり

二十、汝が平和を求むれば汝の家人の胸中には宗教心を警醒す

二十一、汝は行を以て「ホーム」の標本たれ弱きを援け少年を奬勵し縱意を去りて一同に均一なる行爲を爲せ

二十二、相互の尊敬を以て一致を据附けよ一致の存せざる處には不和と爭端在り

二十三、汝の家人幷に汝の婢僕を遇するに均一なる喜びと威嚴とを以てせよ譴責、命令及拒否するの言に注意し決して下等なる野鄙の語を混ずる勿れ決して榮譽心と恥辱とを損する勿れ

二十四、相互に不信認を去れよ信認は信認を生す假令一時の戯れにもせよ之を失ふことなかれ

二十五、汝の小兒をして汝に信賴するの心を失はしむる勿れ過失を爲す毎に直に之を告げしめよ嚴に失することあれば僞善者を生ず

二十六、汝は汝の「ホーム」の内輪に就ては緘默を守りて「ホーム」の幸福の周圍には堅牢なる壁を築け之が破損しあれば汝は自己を制し又他人を御し能はざるものを

二十七、「ホーム」中に一般の愛、相互の信認及一致の幸福を奬勵するには汝之が勸告者たれ敎師たれ

夏季小兒の死亡多きは何に因るや

しばのや

とて獨逸の宮中顧問官ドクトル、マイチルト氏が頃日「ドレスデン」の小兒會にて爲したる演説は眞に數年間の統計に基きて立證したるものなれば間に合はせの言にてもなく大に參考するに足ると信ずれば譯して世の母刀自方に示す事とは爲しぬ

「ドレスデン」市中にて小兒が夏季に死亡するは市外に於けるよりも多くして其原因は首として痙攣と下痢とにあり特に勞働者の群居する市街には著しきを認む家屋の密接せる處にては死亡も隨て多く空地を有するの家屋にては小兒は斃るゝと殆んど皆無と云ふを得又土地の高燥なるは死亡上に非常なる關係を有するものにて平屋にては小兒は一才以下にて斃るゝ多きも二階三階に至ては漸次に其數を減ず而して其病源を探究するに專ら營養に存するもの、如し母乳を飲むの小兒は斃るゝと少なきも牛乳若くは人造營養飲料を以て養育せらるゝの小兒は殆んど死亡の半數以上を占む今之が原因を推測するに小兒は夏季には發汗すると多きが爲め軀中の水分を失ふと少なからずして渴を覺ゆ此時母刀自の多くは牛乳を與ふれども牛乳は小兒の滋養にはなれども渴を止むるを得ず然るに胃の中には必要なるよりも餘分の滋養が充滿するが爲め異常を呈して病芽を發生し遂に不歸の客と爲らしむるに至る故に小兒病を豫防するの一大要は一度煮立てゝ冷やしたるの水を與へて渴を止めしめ而して後ち食物を與ふる如くすべし又小兒の被服は涼くして輕き物を撰び寢具も寢冷えせぬ迄に留むべし太陽の入りて晩涼の候になりなば此清涼にして健康に効ある涼風を逐ひて逍遙し愛らしき頬を醒めさせるは小兒を大に喜ばしむるものなり此養生法は實に簡易なるものなれど總て六ヶ敷學理的

よりも却て此簡易中にこそ萬金にも替へ難きものを藏するとあるものなれば毋刀自は之を試みて健全に其愛兒を養育せられんとを希望す

簡易旅行（附り蕉翁行脚の掟）

漫遊生

旅行は成るべく簡易の方針を取るべし、旅は少し位は不自由なるとも種々なる携帯品を持参するは甚だ不便の事多し、素より殿様的、行列的、贅澤的の旅行ならば知らぬこと、御馬も御輿も御雨掛も御伴の衆も澤山ならざるべし、然れども吾人は眞の娯樂として旅行を企てんとならば、是非とも簡易の方針に依らずんばあるべからず

平民的叙情短歌の中興開祖松尾芭蕉は常に一簑一笠、天下を周遊しき、彼の行脚の掟といふに言へらく、

一ひとつ宿に再宿すべからず、暖なるむしろをおもふべし

一腰に寸鐵たりとも帯すべからず、總てもの丶命をとる事勿れ、若し父の讐あるものは門前に遊ぶべし、いた丶きふまざるの道にしのびざる情あればなり

一衣類、器財相應にすべし、過ぎたるはよからず、たらざるは悪し

一魚鳥獸の肉好みて喰ふべからず、美食珍味にふける人は他事にふれやすきものなり、菜根を咬みて百事なすべき語を思ふべし

一人の求なきに己が句を出すべからず、のぞみをそむくもしからず

一たとい險岨の境たりとも、所勞の念を起すべからず、おこらば中途より歸るべし

一馬駕にのることなかれ、一枝の枯枝をおのれが瘦脛を思ふべし

一好んで酒を飲べからず、饗應により固辭しがたくとも微醺にして止べし、亂に及ずの禁あり幽亂起歳の戒祭にもろみを用ゆるも憎みてなり、酒に遠ざかるの訓あり愼めや

一舟錢、茶代忘るべからず

一他の短を擧げて己が長をあらはすことなかれ、人を謗りて己にほこるは甚だいやしき事なり

一俳諧の外雜すべからず、雜話いでなば眠居して勞をやしなふべし

一女性の俳友にしたしむべからず、師にも弟子にもいらぬ事なり、此道にしたしまば人を以て傳ふべし、惣て男女の道は嗣を立てるのみなり、流蕩すれば心敎一ならず、此道は主一無適にしてなすのみを省べし

一主あるは一枝、一草たりとも取べからず、山川江澤にも主ありつとめよや

一山川舊跡、したしくたつね入るべし、あらに私の名をつくることなかれ

一一字の師思たりともわするゝなかれ、一句の理をも解せず人の師となる事なかれ、人に敎ゆるは己をなして後の事なり

一一宿一飯の主もおろそかにおもふべからず、さりやとてこび諂ふことなかれ、如是の人は世の奴も此道に入るものは此道に交るべし

一夕をおもひ、旦を思ふべし、旦暮の行脚といふ事は好まざる事なり、人に勞をかくる事なかれ、しばしすれば踈ぜらるゝ事をおもふべし

これを見れば芭蕉の理想(道德、風流、交際、處世等)の幾分を察せらるゝと共に、如何に此翁が物質、精神共に簡易の方針を以て旅行したるを知るに足るなり。

時下殘暑初秋の候、尙ほ旅行に適す。

旅行は簡易なるを要す、及ふだけ手荷物を輕くすべし、

一本の蝙蝠傘は晴雨緩急に應し、衣服は單簡なる脊廣の洋服宜し、中形の手提カバンあらば一二枚の着替(日本服)、料紙、鉛筆、手巾、齒磨道具、石鹼、スボンヂ、ナイフ、はき代の靴足袋、水呑、マッチ、シヤツ、西洋手拭、持藥、隨意の小冊子等を容るゝを得べし、これ以て世界萬國を漫遊跋涉するに足るなり。

此頃注意すべき事項

本年は土用中降雨多く、冷熱常ならざりしかば、殘暑嚴酷にして寒暖計九十度以上に上り、毎日熱しあつしと言ひ暮しぬ、さて此頃注意すべき件々を少しく記すべし

一府下虎列羅病頗る猖獗を極め、一區內に毎日數人の患者を出し、巡査附添ひの吊臺と道に遭遇し、決して氣味宜しきものにあらず、虎列羅を出せし近隣にて恐怖を懷くも無理ならず、さて如何にして此病毒を豫防するや、患者と接近せざるもつとむべし、身体、衣服、家屋の清潔を保つべし、食物の清潔なるを撰ぶは勿論の事なるが、其食物につきて少しく言ひたき事あり、虎列羅ベチラスなるものは食物の腐敗したるに棲息し、人は之に觸るゝが故に則ち其病毒を發すると、いふ、斯の如く虎列羅は傳染病なりとせば、清潔にして些の腐敗なき飮食物を食すれば決して病毒を起すことなき筈なるに、新鮮なる鮪を食し又は新鮮なる菓物を食し、又は横濱市役所の某助役は新鮮なる「アイスクリーム」を喫して斃れたる所より見れば、吾人は少しく疑惑なき能はず、西瓜を見よ、其外皮は厚く到底「バチラス」の侵入する隙間なし、然るに西瓜を食して此災に罹りし原因を聞くに、最も新鮮なるものを取りて之を分割して瞬く間に喫し終るや忽ちに虎魔の襲ふ所となりて冥途の旅へ赴

きぬ、此點より察するに西瓜を割きし一秒時間にはバチラスが侵入せしとも思はれず、吾人は實に虎列羅病の全然傳染病なるを疑がふ、記者先日房州平郡加知山へ漫遊し、全地へ滯在中忽然として虎列羅病患者を出したり、其原因を聞きしに、其患者は晝間眞桑瓜二十五個を食し、麥酒二瓶を傾け盡したりと、是に於て吾人醫道を知らぬ門外漢は、病毒は外にあらずして内にあるを認めり、病毒の原因は暴飮暴食にあるなり、原因は必らずしも菓物、眞桑瓜、氷などに限らず、飯にても菓子にても茶にても暴飮暴食すれば吐瀉は免かれず、殊に注意すべきは昨今のやうなる疫病流行の折柄なれば、性質能きは吐瀉にても類似などゝ名づけられて病院へ送らるゝ事ありては不健全の場所にて他の眞性のものと混淆せらるゝ苦痛のみならず、尊き生命を抛つに至りては、耻辱と不幸此上なきにあらずや、謹むべきは暴飮暴食にあるなり

一記者今旦芝山内を逍遙せしに、一漢あり、大なる西瓜一個を弄び、其眞中より打ちこはし、片手に西瓜の全躰をかゝへ、片手にて其中心なる赤き實を摑みては喰ひ、喰ひては摑み喰ひ殆ど應接に遑あらず、又殆ど咀嚼に遑あらず、見る間に全躰を喰ひ終りぬ、記者此光景を目擊しかゝる連中こそ直樣虎毒に中るものなるべしと舌を卷きて寒心しぬ、謹むべきは暴飮暴食にこそ

一此頃は肉類を能く撰ばざるべからず、殊に魚肉の内生利と稱する松魚を蒸したるものは、惡くすると小蟲の生ずることあるを知らずして食すれば飛んだ事に成り行く恐あり、又甘鹽の鹽魚は能々注意ありたし、其肉の中に害蟲を生ずるものあれば吟味專一なり、此頃記者の宅へ大磯滯在の友人より朝の地曳の漁にて捕へし松魚のピン／＼したる

を土産に貰ひ、其日の晝食には膾炙頗る口舌を喜ばせ、其餘は鹽魚としたる其翌日は蛆の如き小蟲湧きたるを見て實に慄然として再び顧みることなかりき、斯樣なるものなれば生利、甘鹽の魚類を厭ふと共に夜店などに並べあるものも滅多に買ふべからず、必らず信用ある肴屋に命ずべし、不信用なる料理屋などの飲食物は用心あれ、下等な料理屋などにては少し條件ある鷄卵などを安く買ひ求め之を玉子燒に製し、うまく〳〵食せらるゝことあり、當今の時節にては成るべく他の料理屋にて他人の製したる飲食物を食ひに行くは良き分別にもあらず、牛肉とても必らず其精良なるを撰ぶべし、肉を指にて推し試み彈力なきは宜しからず、一片の肉を壁面などへ投げ懸け、粘着力なき者は良肉にあらず、精進料理にても豆腐の如き腐敗し易きものは勿論、宵越の飲食物はよろしからず、飯にても成るべく朝炊き、笊の中か左なくば風通し能き所へつるし、腐敗を防ぐべし、牛乳は最も腐敗し易ければ、三時乃至四時間以上經過したるは用ゐざるやうにし且つ牛乳罐を冷水にひやし置くべし、刺身のやうなものにても二三時間後に食せんとならば、蠅又は小蟲などの集らぬやうにし其皿を冷水につけ置くに如かず、是等は是非々々注意ありたきものなり

一殘暑酷なりと雖も、朝晩は冷氣を覺ゆ、此際寐冷に罹るもの多し、殊に小兒などに多しとす、大人は夜衣を用ゐずば、袷を寐衣とし給へ、幼兒は寒を覺ゆること著しきと共に熱を感ずることも甚しきものなれば、夜間夜具をふみぬぎて裸躰となる癖あり、之が爲め寢冷にかゝる事あるものなれば「フランチル」製の腹當をさせ置くか、但しは腹部と股間を蔽ふやうなる襁褓を當て「セフチー、ピ

メ」(唐物屋にあり廉價のものなり)にて閉ぢ置かば、寢冷を防ぐと共に大小便をも防ぐなり(愛讀者より如何にせば夜間幼兒の大小便を防ぐやと質問ありたるが、襁褓に此セフテー、ピンを用ゐ玉へ決してふみ拔ぐことなし)但し「フランチル」か柔軟の木綿切を用ゆるが宜し

一小兒少年は外出して遊嬉すると好むものなれば此大暑を避易せず、家外に出で蟬を捕へ、蜻蜓を追ひ知らず／＼暑氣に中るものあり、記者芝久保町を通行の折、何とか呼べる左官の息子中暑して卒倒せるを目撃したり、家外の運動は宜しけれど、やくが如き太陽に直射せしめぬやう心かけありたし

以上の注意は今一個月も過ぎなば無用に屬するならん

手藝案內

造花術(菊、椿、水仙、福壽草)

菊。蘂は(菊が黃色ならば)黃色の木綿糸たつぷり取り、これまでの通りにて銅線につくる。瓣は「コットン、エルロー」又は「ピクリックアシンド」(共に西洋染粉なり、一包一錢又は二錢なり)にて染めたる寒冷紗を摸形によりて裁ち、大瓣三十枚、中瓣二十枚、小瓣二十枚ばかりを用ゐるものは瓣の少なきものと知り玉へ、菊鏝をあて少さきものより次第につけべし、より菊は筋鏝にてよろし、瓣先の開きし部分は、菊鏝を用ゆ、小菊ならば一重づゝ切りたち、又は打貫とも便宜に任せて可なり、色合は實物に隨ふべし。蒂は小菊の打貫を形によりて用ゐ、葉色に染めて裏に少しばかりの綿をつめてふくらみを持たすことを忘るゝ勿れ。莟は櫛齒

のやうに切り裁ち、筋鐵をあて蘂を包みて蒂をつける。葉は打貫大小三四本を適用するを得策なりとす、菊の葉は屈曲多きものゆゑ、之を切裁するには頗る手際を要すといへども慣るれば六かしきものにもあらず、用品はキヤラコの葉染にしたるものを用ゐ、葉筋を筋鐵にしつけ銅線を用ゐてつける。幹は女竹等の先を用ゆるもよし、又銅線を心とし紙をよりて添へ青紙を捲くも宜し。纒方は銅線を心とし、瓣をつけ蒂をつけ、且つ葉をつけてつくるなり、菊花の製作につき殊に注意すべきは、此花は幹又は莖の節々に少さき葉あり、之を忘れぬせねば實物と相反するに至るなり。

椿。

椿は冬の花なれどこれより其製作法を案内し置かんに、蘂は淡黄色にカタン糸を染め、又粟粒を黄色に染め、其さきへつけし糸を紙にならべて糊付を爲し、綿をかため銅線にて結びたるものに捲くべし。瓣には單瓣重瓣いろ〳〵あれど、こゝに二重のものは大小各瓣五枚にてよろし、其實物の色(赤色)の染粉にて染め、模型によりて切り出すなり。萼は綿を心と定め、青紙にてつゝみ、其上へ「キヤラコ」にて、蒂の如くに切りたるものにて、幾枚となく圓くつゝむを要す。蒂は葉染のキヤラコを五角形に切り裁ち、五枚にて一連となす、これを二三べんたがひちがひにあてゝ蒂となすと心得あるべし。葉はキヤラコの葉染のものより、其模型によりて切り出し、裏に銅線をあてゝ葉條とし、表へ蠟などをかるく塗りて葉に青ひかりの光澤を出す工夫ありたし。纒方は蘂へ瓣をつけ、蒂をつけ、之を實物の枝へ取りつけ、花際より二三枚の葉をつける、これも充分實物を撿査し、及ぶだけ眞に迫るの術あるを要す。

水仙。

蘂は淡黄色の寒冷紗と紙にて蘂を製し、之を銅線につ

け、それに蘂をかこみたる寒冷紗にて猪口のやうなものをつけるなり。

●瓣は梅の少し黄色を帶びたるものに寒冷紗を染め、一瓣毎か又は三瓣つゞけに切り裁ち、菊綴の一本筋のものにて中央に條をつけ、三瓣二重につくると知るべし。

●蒂は淡綠紙則ち青紙を筆にまき、尖をよりて一端を切り開き、其の處へ瓣のとりつくやうにする。

●莟は心に綿を入れ其上を寒冷紗にてつゝみ、折目にて角をたゝし、それへ蒂をつける。

●幹は瓣を細く圓くけづりたるうへに青紙を捲きたるものを用ゆ。

●葉は相もかはらず、キャラコの葉染にしたるものを葉の形に切り、中に銅線を入れて後ち、上に少しばかり白粉をすり込むは能き思付なり。

●●纒方につきて言へば一軀水仙花は花軸より花の出づるものなれば、莟とも三四本をあつめ、軸へとりつけ、蠟紙又は薄葉紙をもて罩をなし、之に葉三四枚をつけ根にてまとめ、薄葉紙に少し黄色を帶びたるものにて二三段包み置くなり。

福壽草。

●蘂は兎の毛を黄色に染めしもの。

●瓣は黄粉にて染めたる寒冷紗の切出し、瓣の數は十二三枚乃至二十枚、外側のものは小形にして茶褐色(マセンダ染粉を用ゆべし)、内側のものは、瓣の外面、少しく「イマセンダ」(染粉)の薄きものにて塗り、金色の光澤を出し、其上へ濃き黄色にて餘り目に立たぬやう細き筋を入れ玉ふべし。

●蒂は瓣も甚だまぎらはしく、外側の茶褐色なるものは則ちこれなれば改めて言はず。

●幹は蘂より纒めし銅線に青紙を巻きしもの。

●葉、福壽草は葉の出ぬうちに花のひらくをよしとす、

葉は人參の葉のやうにギザ〳〵つき屈曲頗るこまかきものにて、之を切り裁つに手數を要すれど、澤山用ゐるにはあらねばキヤラコにても、青紙にても其形に切り裁ち、鏝にてよらし新芽のやうにする。

●莟は瓣を鏝にてよく窪ましたるもの、素より外面をマセンダにて染めしものを用ゆべし。

●●●はかまは長く伸びて葉の出づるまでは、幹は皆うすき袴にて蔽はれ居るゆゑ、袴は美濃紙にて造り、マセンダにて緣を染め、中をうすきマセンダにて染むる。

●●繼方は例により蘂に瓣をつけ軸をつけ、花際より新しきより葉を出し、其きわより袴を以て蔽ひ包むべし、福壽草はお正月の花なるは少女も知る所、其少女達試みに造り玉へ。



社交一斑

流行の栞　春夢

銀モールの流行（簪類）

銀モールの髪具に於ける勢力今尙ほ强大にして、先年非常に流行せしゴムの位地を奪ふの觀あり、殊に夏向は其色の淡泊なると量目の輕きとを以て、人意に投ずるものならんか、余が目に止りし同品製作の花簪の二三を擧ぐれば、

銀モールにてすかしの毬の中に菊花一枝を挿き、頭にかざし風に遇ひ、內外ともくる〳〵とめぐる間一種の光采あり、一寸思ひつきなり。

同銀モールにて製したる薄も亦一種の趣ありて面白し、從來は洋銀製なるが銀モールよりも重きが故に夏向に適せず。

菊の花を寄せてすかしの花笠これは頗る斬新の作なり。

根掛にして銀杏、天神髷などに適したる社會の流行品は莖を打紐(赤、藤紫、びわ色大流行)にして其上に金銀モール製の菊花を置くもの最も盛なり。

島田と丸髷には銀モール製の網代編、(これは今日あらはれたるものにも

あらず昨秋ごろより）又はすかしに網目の根掛流行す、これは涼氣にして輕やかなる爲なり、素より島田の両へは幅廣きかた、丸髷には幅狹きかたにて、網代形に眞珠(人造)を嵌めたるも見受けらるゝなり。

漁村婦女の風俗

余今夏房州に漫遊し、漁民の風俗を見るに都會とは其風俗、好尙を異にするもの一々掲げ易からず、漁村には漁村だけの流行あるなり、妙齡の婦女子の衣服を見るに素より質樸の趣あり、其模樣は花鳥風月ならで、波に章魚、鯛、鯔、鮪、若しくは小魚などを出せる絞りの浴衣を着るもの多くあり、以て土地の人心の向ふ所を察すべし、男女とも派手ならず質素の風あると共に、婦女子に至るまで日々の職業あり、孜々營々之をつとむ。

十日餘滯留したるに丸髷の婦人も島田髷の婦人も見しことなし、漁村婦女の髮風は銀杏返しにして、根懸もかけず太き紙切にて強く其根をくゝり居るのみ、これでは一箇月も大丈夫ならん、三日あげず髮を結ふ都會の婦女や寢辯の惡き女子に寫させたし呵々。

伊豫絣

伊豫絣は伊豫松山地方の特産物にて東京にても隨分評判宜しきが昨年來非常の不景氣にて轉業するもの續々ありしが彼の第四回內國勸業博覽會開けてより頓に各地の注文增加し工女爲めに拂底し職賃騰貴し爲に下女奉公なし居るものさへ工女となるに至れり元來伊豫絣は夏向の品なれば例年初夏に於て注文多く晩夏に至れば注文殆んど皆無となるの例なるに本年は今日も尙多數の注文あるは要するに勸業博覽會に出品し廣く世上に知られたる爲め斯く需用の增加したるならんか

凱旋織

大山西鄕兩侯爵夫人、樺山伯爵夫人、土方子爵夫人等の發起にて征淸軍に隨ひ戰死したる將校下士卒の寡婦にして、能く貞節を守り女子の龜鑑たるべきものに贈らん爲め、今度皇后陛下より御製繃帶綿絲屑の下賜を願ひ之に意匠を凝らし凱旋織と稱する紀念の織物を新調する筈にて各府縣知事に向ひ其取調べ方照會中なりと余は斯の如き凱旋織の流行の盛大を望む

道樂文學

本月四日の國民新聞論說欄に『道樂文學の流行』と題し曰く

通、粋、意氣てふ言語、風俗は甚だ不健全なる意味を包容なす。家としては家を亡ぼすの前兆也、會社としては會社を亡ぼすの前兆也國としては國を亡ぼすの前兆也。

近ごろ滿天下を風靡する三文文學の流行の如き、亦是れ所謂自稱道人、自稱粋人の増加せる證跡にして、一個人としての爲めにも、國家の爲めにも、齊く悲しむべき傾向ありと謂はざる可らず。

若し國家の汚辱を汚辱と感ぜざる程に墮落せる姑息の天地に、道樂文學遊戯美術の流行するは怪しむに足らず。吾人は只斯の如き流行を醸みたる一般空氣の汚濁なるを深慨す。

余は此事につき此説を言はんとせしに先輩已に説あり、近來東京も地方も商工業家の子弟が己が大事の家業を忘却し、俳句、詩、歌などの空文に凝り、まだ煮えきらぬものを掲げて天下に得々たるを見聞して毎度片腹痛く思ひぬ、併し家業を第一として娯樂のため風流をやるは別問題に屬す

西瓜の食かた

惡疫流行の際なれば西瓜を食ふもの最も遠慮せるが、一種の喰方により安心して食するもの、往々見受けらる則ち其法は先づ西瓜を割りて其の赤き分の肉を細かに掻き取り其儘之を釜に投じて蓋をなし二三十分間沸騰せしめ、偖之を卸して布袋にて絞り赤肉と種子とを除き尚は細篩にて漉し成る丈精密に滓を去り未だ熱度の冷却ざる内に壜に詰め固く其口を封ずべし、斯の如くにして之を壜の儘冷き水に投じ充分冷却したるをコップに移し飲むときは、消夏の飲料として實に妙なり、且つ特に砂糖を加へて可なりといふ、西瓜は外觀より多分の水液を含むものにて稍大なるものは一升五合乃至二升位の液汁を得らるゝものなり又壜の儘暗き處に置けば自然に醱酵の作用を起して其含有の糖分はアルコール質に變じて一種の酒類を得るものなり併し消暑の飲用には酒質は變ぜざるものを可とす

着物のきかた

先達は今様帶の結び振りといふ事を書きしが或人より、ならば當世着物のきつきを掲げ見よとの仰ありければ及ばずながら其眞似事をちとばかり

着物のきつきは重に帶のメ方にてどうにでもなるものにて帶の事は其節記した通り今更くど／＼言ふに及ばず、さて着物のきつきにつき第一に心をつくべきは仕立方なり、これは大層着つきと關係あるものにて夫の

傳坊肌の哥兄さんが引張り居る七五三(後みごろ七寸、前みごろ五寸、おくみ三寸の仕立)の如きは一種毛色の變りし下等社會の着物にして膝小僧を容謝もなく露はせる風俗、決して正人君子の學ぶべきものならぬを意氣を衒ふ婦人などはこんな眞似をして赤い蹴出しをチラ〳〵と見する風あるがこれは惡い當込なりこんな習慣をつくるとキチンと正服をつけて眞面目な場席なぞへ出てお里が現はれること妙なり、『河内山宗俊』の芝居を見た人は存知なるべし、宗俊が上野の使僧と詐り松江侯の邸内へ乘り込み、マンマと仕事を仕おうせ玄關より立歸らんとする間際に用人北村大膳に見あらはせられ「成程おれは河内山宗俊だが」と世話に登調のなる所、左團次は擧足になれるが、團十郎と故家橘は法服のまゝ玄關に腰かけ居れど宗俊は元がそれ遊人の癖として身巾の狹き着物を着し習慣あるため膝はくづさず擧足にもなられど膝と膝の寄りあんばいより直ぐに下品に見ゆ宗俊は法服を被り居るも矢張べらぼう肌の人物と見ゆるは右兩優のねらい所なり、左すれば七五三の仕立などは夢にもせぬ事なり

襟は廣く開けぬかた上品と知るべし、襟のさば〳〵と開きて中襟の廣い所や乳などをあらはすは善からぬ風俗ならずや、傳坊社會の人は男女とも恥かしくもなく廣く胸を見する癖あり

襟肩は日本的婦人は髱に油氣澤山につき出し、領元へ白粉をコテ〳〵塗つくるゆゑ襟肩に移らぬやうにつきぬき襟にせねばならぬが、束髮と白粉氣なき婦人は男同様襟肩二寸三分もあけば當世普通の仕立なり、

腰のつまみは成るべく多くとりたるかた格好よろし男とちがい女子の着物の丈を成るべくたつぷりするはこれが爲なり

男にても女にても袖口のあき廣きは惡し、人形はある方帶を上に〆むる便宜あれば上品なり、人形のなく袖を斜に仕立るなどは遊人社會に限ぎるものなり

惣じて着物の寸法を言へば上品なるはユキもタケも身巾もたつぷりしたるもの、下品なるはタケは長くとも身巾著しく狹く(所謂七五三)ユキも充分ならず袖腕にいたる短褐の書生社會、壯士連は意氣と野暮の外なり」さて如何にしたらば申分なき着物のきつきが出來るものぞ、暫く自分勝手な說は申さず、目下の流行に就きて言へば

男子にして品の能き仕立形を示せば丈長く行一尺七寸五分より八寸まで(勿論大人)身巾は前八寸後七寸おくみは四寸、袖丈一尺四寸袖口のあきは七寸、人形は一寸五分、褄下は一尺八寸(丈三尺七八寸着る人にて)女子ならば丈四尺、妙齡ならば袖丈一尺六寸より六寸五分、年增の人は一尺五寸より一尺五寸五分、四五十歲の老年は一尺四寸より四寸五分ま

で、口あきは六寸より六寸五分、袖つけ六寸より七寸（妙齢は短く年増は長く）身巾は七寸五分より六寸、おくみは四寸、つま下は一尺九寸より二尺とせば上品にしておさなしきかたなり

チト傳坊にせば前みごろ七寸五分後六寸、おくみ三寸五分、袖口のあきた一尺より一尺一寸位にし、袖丈一尺二寸、ゆき一尺七寸、人形なし

（男子）は意氣ではあれど誰でもなさいと勤めは致さず

着物のきつきも前申した通り帶の〆かたでどうでもなる、婦人のおたいこ風でも素人のはキチンと眞四角なるが、ちつと毛色の變りし手合は左方へれかして、左の隅を燧形にちよつとばかり折る風情あれば、一見あれば普通の鼠でないといふ事が知らるゝなり

歩きかたにてくゞみ脊になれば野暮となり、反身となればオホンと咳が出さうなり

着物のきつきたても帶の結び振りにたも成るべく質素の好みこそ望ましけれ、何と申せば大低外部の風俗にて其人物が知れるものなれば妙な眞似をして世間より誤解せらるゝは到底損な話ならずや

日用品物價（九月五日）

◉白米小賣相場（九月三日改正下落四日ゟ實行）（一圓に付）●一等白米七升五合●二等白米七升八合●三等白米八升二合●四等白米八升五合●五等白米九升〇〇

◉雜穀（一圓に付）●本場大麥三斗一升●脇場大麥三斗二升●地廻裸麥二斗三升●船橋小麥二斗一升●下總小麥二斗一升五合●常州小麥二斗一升五合●竹林麥上一斗六升五合●竹林麥並一斗八升●割麥上一斗六升五合●割麥並一斗八升五合●本石大豆品なし●支那白大豆二斗〇五合●同靑大豆一斗七升五合●元山大豆一斗五升七合●仁川大豆一斗七升五合●越後大豆品なし●室蘭小豆一斗四升●越後小豆一斗五升●支那白小豆一斗五升二合●本場金時一斗二升五合●向地金時一斗四升五合●大和空豆一斗八升●播州空豆一斗八升●肥前空豆二斗一升●古河空豆二斗一升●同豌豆二斗一升五合●川越豌豆二斗〇五合●銚子隱元一斗五升●室蘭大玉隱元一斗五升●同隱元手無一斗七升五合●同鶉隱元一斗八升●同更紗隱元一斗九升●佐野搗粟一斗三升●白胡麻一斗一升●向地新黑胡麻一斗五升●常陸新黑胡麻一斗五升五合●川越同一斗三升●荏胡麻一斗三升五合●本場平豆一斗二升●向地目新黑白さ一斗六升●同新目無白さ一斗六升●売ソバ二斗七升●上稗五斗●新御社大豆一斗六升五合●新流山靑大豆一斗六升●新稻叢小豆一斗五升五合

◉鹽（一圓に付）　赤穗鹽二俵七分五厘●改良八家二俵八分●改良大鹽二俵八分●東濱純鹽二俵七分●本齊三俵五分●改良新齊三俵九分●古積上二俵●同並二俵一分

◎鰹節（一貫目に付）　●土佐節〆中小廿七八圓ゟ廿六圓大廿四圓ゟ廿三圓●同龜二十二三圓內外●宇和節品なし●薩摩節大廿六圓ゟ廿四圓小二十三圓小小十八圓●同鯖龜十一圓ゟ十圓九圓也●伊豆節二十五圓ゟ廿四圓二十二圓內外●同龜二十三圓內外●遠州內浦込節二十四圓ゟ廿三圓廿二圓也●同飾二十四三圓二十二圓也●城ノ腰二十四五圓ゟ廿二圓也●爲

總節廿一圓ゟ十九八圓大十六圓也●同龜廿圓内外●常州岩城節込十九八圓ゟ十六圓十五圓也●同龜品なし●仙臺南部節十五圓ゟ十四圓十四圓内外●同節十六圓ゟ十四圓内外●伊豆島節上十六圓ゟ十五圓五十錢十四圓五十錢

◎醤油（一圓に付）●最上六分五厘ゟ七分二厘迄●極上七分八厘ゟ八分三厘迄●上等一樽一分五厘より一樽三分五厘迄●中物一樽五分●並物品切れ

雜録

唖馬王の家庭

クリスチアン九世といふは唖馬國當今の君なれども、宮中の生活の質素簡易なる、恰も庶人の家庭の如しといふ。爰に其一斑を覗ふ可き逸話こそあれ。

或る日の事、國王、王后、王子、王女、例の如く同じ食卓を圍みて種々の物語の最中、幼き一人の王子今日新らしき言葉を聞きたりとて、其意味を父の君に尋ね給へり。其言葉は我國ならば「打ん擲るぞ」とも言ふ可き時に用ゐるものなりしかば、國王は王子に向て斯る言葉を發したるは誰れなるかを怪しみ、聞き質し給ふに、其日王子は街上に遊び、或る家の入口に呼鈴あるを見て、悪戯にそれを引き鳴らしたりしかば、取次の男出で來りて王子を叱したる時の語と知られたり。國王、左樣の悪戯して捨て措くは悪しかりなんとて、食後直に王子を伴ひ、其家に至り、懇ろに詫言せられしとぞ。

うもれ木

閑水生譯

一年霖雨久しきにわたりて、ポウ河を始め、大小の河流皆暴張して、ロンバルディ州は浸されぬ處なく、家は流され作物は洗ひ去られて、貧しき人は眠るに處なく食ふに物なき窮境に陷りぬ。今や僧徒等が忙しき

時こそ來つれ、彼等は朝まだきより夕たくるまで、足のつゝかん限り遊說し、舌のつゝかん限り勸進して、力ある人に力なき者を救はしめたり。

サンバビラ市のある寺に住職を務むる人は、我外戚の伯父にて、當時我は此人の家にとまり居りき。日頃德行の名高き我伯父の僧が、かゝる時にいかで手を懷にして坐視してあるべきや、勸進に出で行かれしは每日の事なりしが、ある日我も隨ひ行きしに、伯父の容貌の氣高く尊きと、其辯說の優れたるとに動かされて、誰も彼れも義捐を辭むものなく、思ひしよりも多くの金は集りたり。

日も既に暮れたれば、いざ歸らむと家路に向ふ途に、とある町を過ぎ行く折しも、一軒の家の窓より劇しく咳き入る聲の漏れ聞えたり。我伯父はしばし立どまりて耳を傾けたる後、

『あれはブリッキオリ氏の咳の聲なり』かく言ひて伯父は肩をゆすり動かし、『說くとも其效なからむ、彼の人はいたく富めりとのことなれど』と、胸のうちに自問自答する躰なり。

『常に破れたる衣服を着け、補綴のあたりたる履を穿ちて、旅する時には御者の踏臺に立ちて馬車賃を儉約するてふ名高き吝嗇家は此の人のことにや』と我は問へり。

伯父は『然なり其人にこそ』と答へ、『もし彼の人傑に十錢なりとも義捐せば、それだけ義捐金の增す道理ならずや』と獨語ちぬ。

伯父は足を轉じてブリッキオリ氏の住へる下宿屋の門に入り、案內を請ひぬ。これに應じて門番の老人出で來れり。

『ブリッキオリ氏は如何におはす』と伯父の問に、門番は答へていふ、『朝より寢床に閉籠りて、終日外に出でられず、あのやうに咳の劇しければ、永くは生き

られざらむ』

『氣の毒にこそ』

『自業自得なれば仕方なし。多くの金を有ちながら、彼の人はそを吝みて、醫者も迎へず、藥も用ゐられず』

門番の呟くを聞き捨てゝ、我等はブリツキオリ氏の室の前に來り、一二度戸を叩きて内に歩み入りぬ。廣間より洩れくる微かなる光にてと見れば、こゝは狹き前室にて、後にはやゝ廣き一室あり。ブリツキオリ氏は我等に其室に進み入るやうにと請ひ、燈光のなきを謝びていふやう、

『咳すると、假睡むとの他に用なき我身には、燈光は要らぬなり。暫し忍び給へ、今マッチを探し居れり。たしか煖爐の傍におきしと覺えしが。ア、こゝにあり』

やがてマッチを摩りて、小き蠟燭に螢火の如き火を點けたり。我は可笑しさに堪えかねて、思はず笑ひしが、幸にして燈火の薄暗きと、彼の人硫黄の氣に咽びて、劇しく咳入りたるとにて、我樣子は氣つかれざりしやうなり。

咳止みて物言ふことを得し時、ブリツキオリ氏は椅子を差出して『先づ座り給へ、さて何の用ありてかく御訪問を辱くせしか』と問ひかけたり。

伯父は言葉を盡くして勸進したり。ブリツキオリ氏は俯きて、靜に聞居りしが、其了りし時、頭をもたげて、嘆息の聲を洩らし、

『あはれ此世には悲しきことの絶えぬことかな。かかる災厄を救はむには、クレサスの富なくてはかなはず、我には何程の事も出來じ、我は貧しきものなれば――』

と言ひかくるに、さてこそ益なかりけりと、伯父も我も皆まで聞かず立上りかけぬ。ブリツキオリ氏は暫しとゞめて、

『願はくはしばし待給へ、かゝる時には我も少しは義

損するの義務あり』
我は心の中に、『多からまじ、たかが五錢十錢に留まらむ』と思ふ間に、彼れは起ちて戸棚を開き、中に積み累れる金貨を悉く取出し來りて、これを伯父の手に渡しつ、
『持合せるは僅にこれ許りなり。去年の事ならんには、今少し意に滿つるほどのことを爲し得たらんに。スウィツルランドに旅せし時、ふと憐れなる流人の一家族に會ひ、いさゝか其窮乏を救ひたり。喜ばしき哉、今彼の人達は不足なくて暮せり』
さて我を顧みて片手を我肩にもたせかけ、聲柔に、
『若き人よ、燈光を欠きて暮しおけば、稀には些ながらも同胞を助け得る時ありと知られよ』
汗は背に流れて、我は穴にも入りたき心地したり。されど此一言は我生涯にとりて、千金の實にも優りて貴し。我等はブリツキオリ氏が健康の速に舊に復せんことを祈りつゝ、別を告げて歸り來りぬ。彼れは門邊まで我等を送り來り、『力の足らぬを誠に遺憾に思ふ』とくりかへして言へり。
クリスマスの祭禮に故郷バヴィヤ府に歸りて後、我はブリツキオリ氏が逝去せられし事を聞きたり。彼れは慈善の用にとて數多の財を遺しおきしが、中にも學資なくて望多き八人の少年をバヴィヤの大學に學ばしめ、其學資にとて三百五十磅の年金を遺しおけり。又彼れの日記を見れば、彼れは常に諸國に旅行して、貧困なる人々を救ふを慣としたること明なり。彼れは又才ありながら逆運に在る人を奬勵することを力め、乃ち伎倆はありながら世に用ゐられぬ畫工彫刻家等に仕事を命じ、高き作料を與へ、而して其作物は皆これを其作者に遺しおけり。此貴き人は常に人に秘して、善行を積みつゝありしなり。己の事には極めて吝嗇なりしかど、他の爲めには千金を惜まざりしなり。生前

彼は衣服の汚きために俗衆の笑ひ侮るところとなりしが、死後千萬人の爲めに賞嘆せられけり。

(伊國ア、ルーナ氏の原文)

南信

在台灣 新平

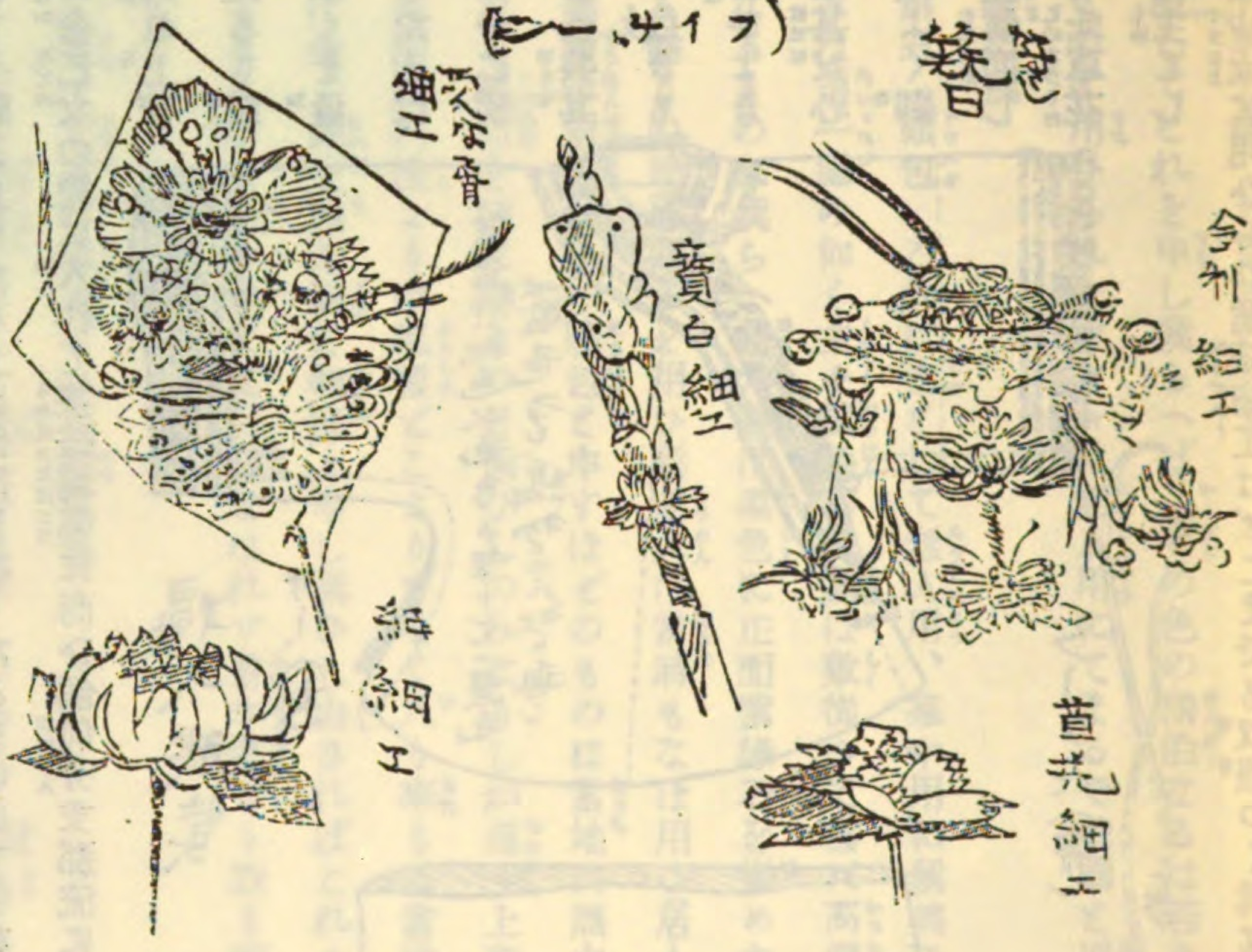
彼等が頭髮を飾るには凡て三種これあり候第一笄第二簪、第三頭包に御座候

一 

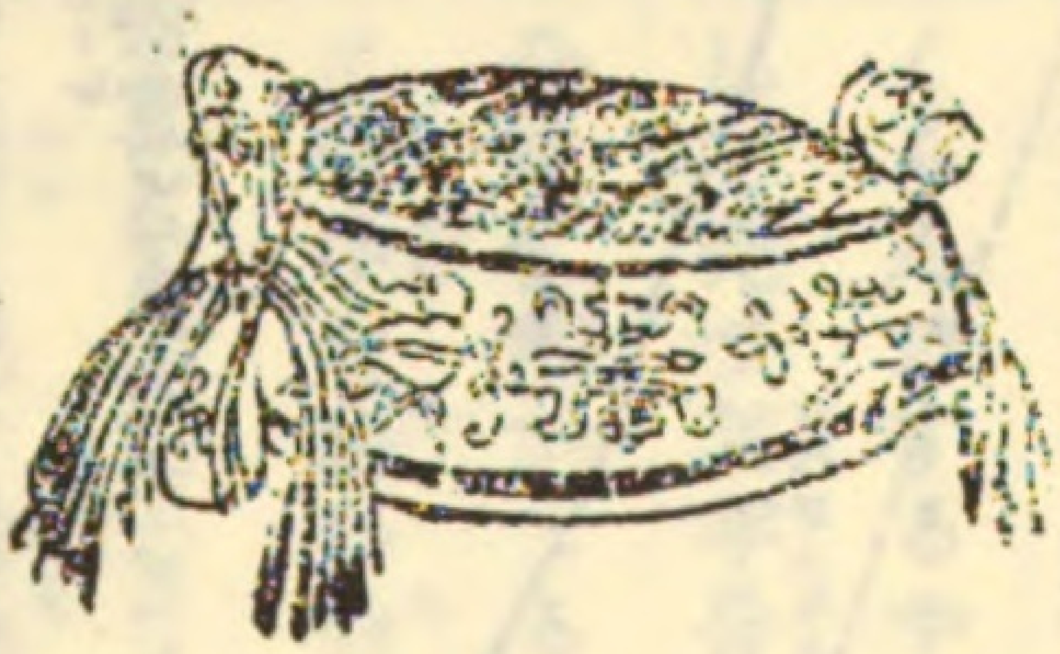
第一笄は圖の如く二様有一は中凹み兩葉高く且つ廣く有之候へ共他は長く一直線にて比較的に細く候共に表面には種々唐草様の摸様を彫りありて先づ婦人第一の結髪必要品に御座候さらば品物も貧富により或は金或は銀又は黄銅とそれ相應にとりなして用ひ申し候、

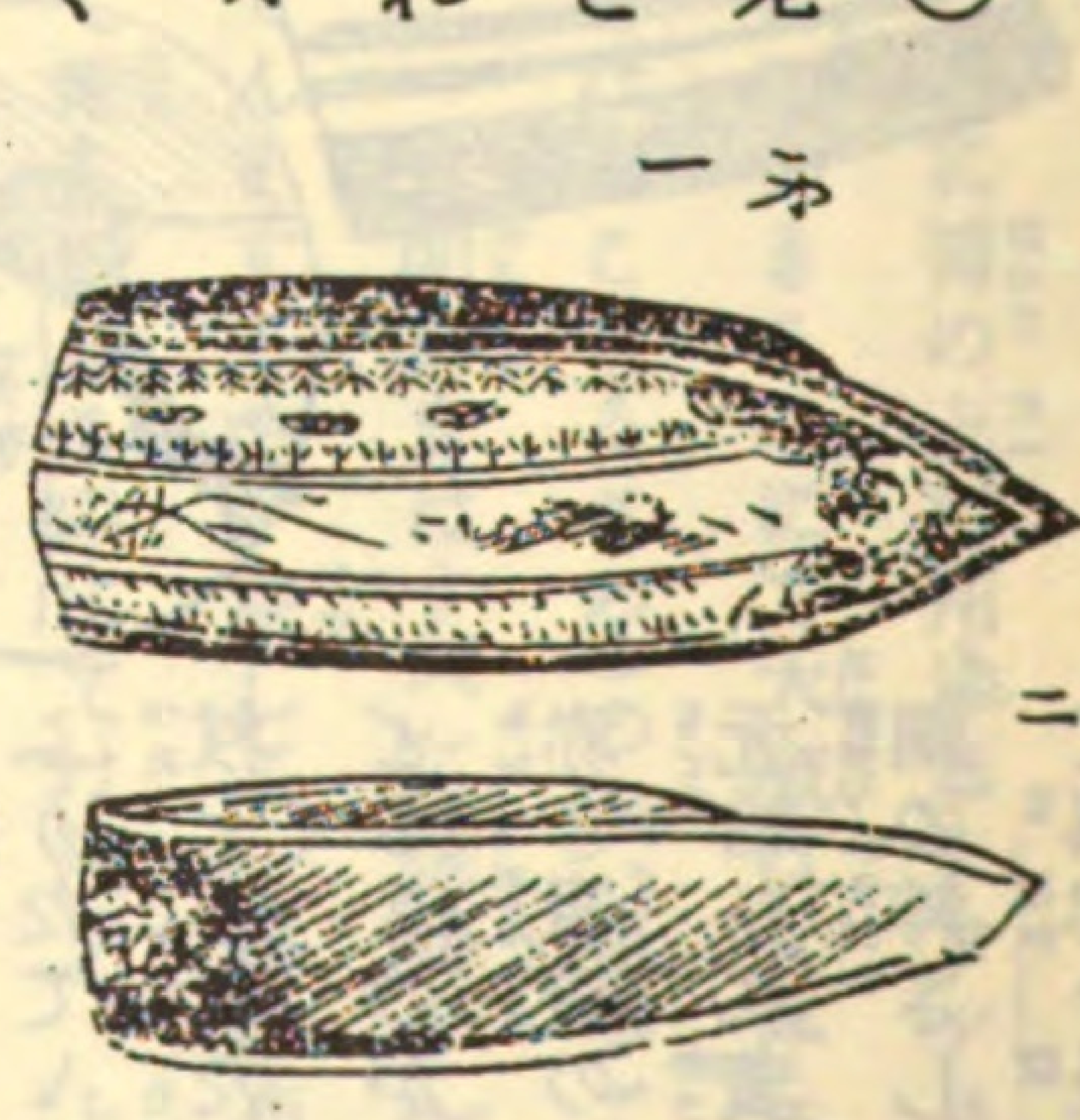
二 

第二簪 目立ずに金のかゝるは笄なれど目に立ちて區別さるゝは何處も同じ簪に候臺灣の如き島國にては流行とか時好とかいふもの無之候らへばさして申し上ぐべき程の價値も無之候らへ共ありのまゝ目につく處をならぶれば細工によりて先づ五ッ通りにわかち申すべし一番やすく手輕きは草花細工か紙細工にてこれは大概五錢以下に御座候次はかんな屑細工これはなかく品よきものに候らへ共やはり小供だましたるをまぬがれず價も廿錢は越へ申すまじ先づ簪といはるべきは寳石細工か金物細工此の二ッのみに御座候寳石細工はごく手輕き處より有之蠟石等にてつくりしものは卅五錢より有之由にて圖の如く何を刻あるかはハキと致さず候へ共いづれ鳥の羽を擴げたるさまに候ふべし、これは一般に少し着飾りし節は用ひられ候金物細工は尤も價高く細工も密に込入り居り候らへば當台灣にては購はれざる由にて富家の者は皆對岸の福州より取寄せ

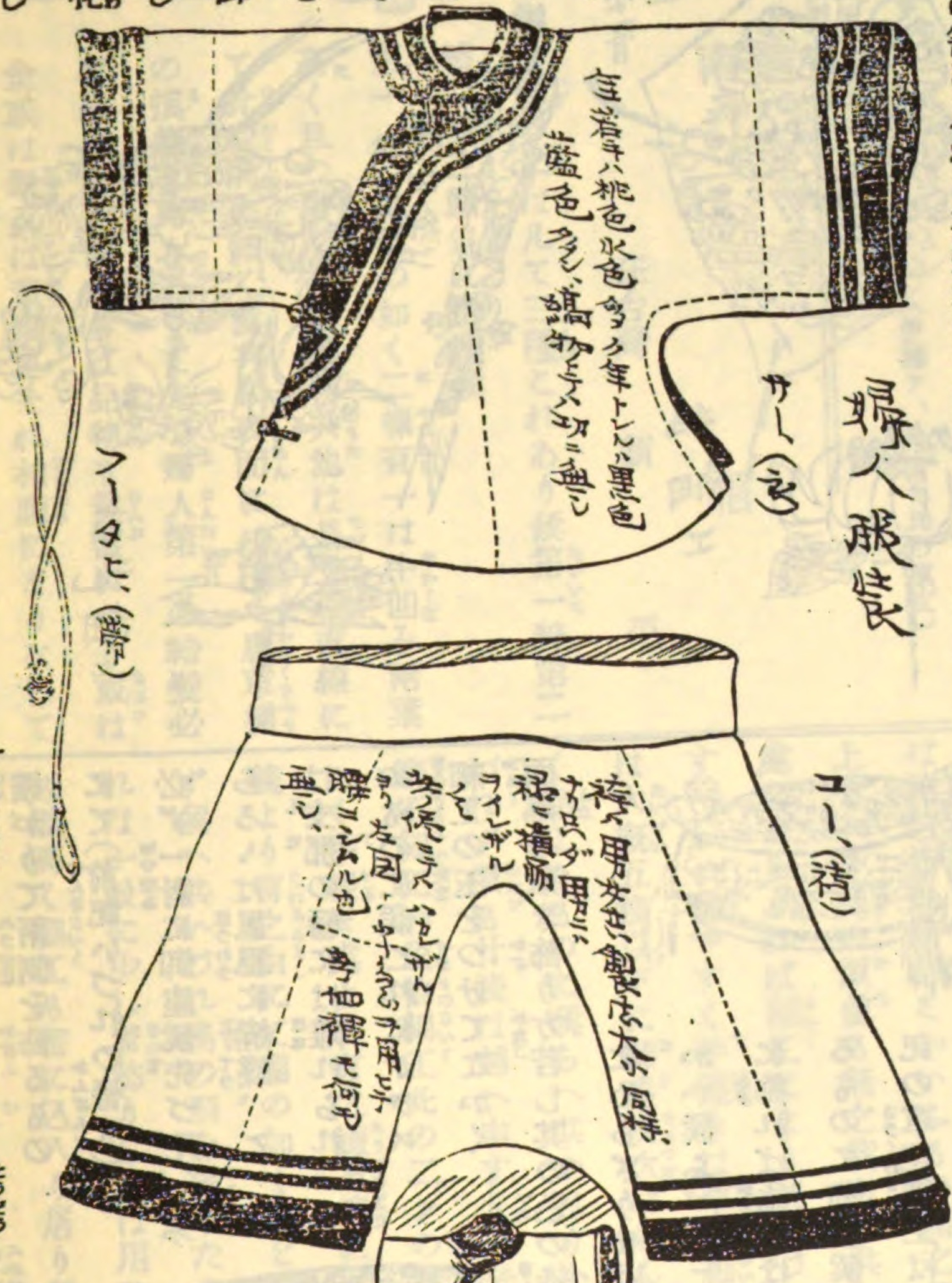


申し候圖の如く頭なりに擴がりて兩側を飾るものにて（前記いづれの簪も）必ず一對に御座候先づ見らるゝは鳳凰に蝴蝶、こは支那の簪には離れられぬものに候これにガラス細工の玉をつけてなかく面黒ろ敷き飾り方若し其の色の緑色なるを常とするにあらざりせば必ず一見して胸につかへ候ふべし」兎に角彼等が眞面目に飾れば飾るほどジッコク奴強くなるものに御座候、此點よりいへば前記の草花細工は甚だ粋に候香ひよき白パンランの花を草葉の上に臺となし之に他の小草花を束ね上げて竹串





にて全躰を止めたる上に銀箔を振りたるものにて毎朝田舍乙女の籠に入れて茶焙場等に商ひ候何分支那流に束ね上げたるも銀ばくを置きたるはいやに候らへ共其の白きも香ひよきは甚だ心地よく御座候而して此草花は主として少女に用ひられ候紙細工はどこまでも奴强つく候其



の形ちのシツコキ上に大概は赤色に候おまけにこれが得意さきは主として卅以上のお婆さんなるをおもひ候らへば開いた口もふさがらず候六十近き婆々様の黒き衣にごま鹽頭ふりたてゝ杖を力にたどるものが赤き組紐の元結ひに黄銅の笄さして眞赤き牡丹簪さしかざりたる、想像しても御覧あそばせ、い

や早や暑つ苦敷ものに候
概してこれを申し候らへば簪の色の淡泊なるは若きものに用ひられシッコキは老人用にてまるで我國と逆様に候

第三　頭包　これは主として老人用、寒中用に候美なるは第一圖の如く主々縫絈して麗は敷從つて甚だ高價なるものに候らへ共大概は黒色に正面紫緑石を嵌めたる飾りの簡畧なるを用ひ候老人は當時もなほ用ひ居り候數年前迄は此の頭包と申すほどのものは當地に無之たゞ黒布を額に卷きつけ候ひしのみなりしが追〻上海香港厦門邊よりの風習どこよりとなく入り來りて當時は全く此土地の風と相成り申し候ひし由さればこれもよきものは此の地にては購なはれず皆本國より取り寄するものに御座候
小供は上圖の如きものを用ひ候
これにて頭飾はよしと致し申すべし、あまり面白くも候らはねば、いざさらば筆つひでに服装のあらまし諸にて御話し申すべし(前圖服装)
此の地には大禮、大式の時に袴の上に用ゆるクワンスーと呼ぶもの(かはり袴の如きものにて大概はシユスを用ひ之に美麗なる縫をほどこせるもの)のみ、至つて簡畧なるものに候而して一ッ面白きはすべて彼等が一枚の衣なり袴なり仕立てんとするや、決して一反の布を幾干にて購ひ我手にて裁ちぬふものにては無之、上着一人分、袴一人分と樣に注文してかれより裁ちりきれを購ひ候ふものにて扨之を家にとり一枚のものにつくらんとするや我國の如く袖は袖、身は身とは縫はずして先づ其半分(片袖と片身)を全く仕上げし後他の半分にとりかゝるものにてこの出來上りし時初めて前のと背中を縫ひ合はせ最后に襟を開けて全く造りあぐるものに候
附て記す當地には裁縫屋の外には反物屋とては無

之、簪笄などは皆無にて何處よりそも彼等は購ふにやといぶかるに、これらは皆擔ひ商人によるものに候とう製の圓き籠をつみ重ねて我國の小間物屋が村より村町より町をあるくが如くに種々簪の外、腕輪、耳飾り櫛笄、縫糸、針、反物等を一荷にしてあるきまはるものに候

次便には「臺灣唯一の女學校」につき申し上ぐべし

青木善七

（口繪の畫解き）

羽前の人に青木善七といふあり。人の難儀を見ること自分の難儀を見るが如く、一村德に化し、皆兄弟の如くなりぬ。

村に彌惣といふものありき。或時租税を出すこと能はずして人より十七兩を借りしが、之を償ふ能はずして歎き居りしに、善七代りて辨償したり。

村に卯右衛門といふものありき。居宅破壞、雨露を防ぐ能はざりしに、善七金を與へて修繕せしめたり。

村に與左衛門といふものありき。屢不幸に逢ひて少しの年貢さへ納め能はざりしに、善七代りて之を納め、又日々の生計をも助けたり。

又慶應二年の頃なり。金八十兩を出だして村役場に預け置き、潤農金と稱し、極めて低き利子にて貸したりしに、其利子積りて數百兩となりたり。乃ち之を貧民救助の資金となしぬ。

其善行此の如くなりしを以て、領主之を賞し、村民亦其恩澤を紀念するが爲に、紀念碑を建つるに至りたりと云ふ。



